

提言

高校国語教育の改善に向けて



令和2年（2020年）6月30日

日本学術会議

言語・文学委員会

古典文化と言語分科会

この提言は、日本学術会議言語・文学委員会古典文化と言語分科会の審議結果を取りまとめ公表するものである。

### 日本学術会議言語・文学委員会古典文化と言語分科会

委員長	小倉 孝誠	(連携会員)	慶應義塾大学文学部教授
副委員長	倉員 正江	(連携会員)	日本大学生物資源科学部一般教養教授
幹事	安藤 宏	(連携会員)	東京大学大学院人文社会系研究科教授
幹事	西村 賀子	(連携会員)	和歌山県立医科大学名誉教授
	渡部 泰明	(第一部会員)	東京大学大学院人文社会系研究科教授
	大芝 芳弘	(連携会員)	首都大学東京(東京都立大学)名誉教授
	川合 康三	(連携会員)	京都大学名誉教授
	木田 章義	(連携会員)	京都大学名誉教授
	久木田直江	(連携会員)	静岡大学人文社会科学部教授
	桑川麻里生	(連携会員)	慶應義塾大学文学部教授
	佐藤 利行	(連携会員)	広島大学理事・副学長
	高橋 宏幸	(連携会員)	京都大学大学院文学研究科教授
	田邊 玲子	(連携会員)	京都大学大学院人間・環境学研究科教授
	三宅 晶子	(連携会員)	奈良大学文学部教授
	山田 俊治	(連携会員)	横浜市立大学名誉教授

本提言の作成にあたり、以下の職員が事務を担当した。

事務局	高橋 雅之	参事官(審議第一担当)
	酒井 謙治	参事官(審議第一担当)付参事官補佐
	牧野 敬子	参事官(審議第一担当)付審議専門職

## 要 旨

### 1 作成の背景

高等学校の国語の教科については、2018年に新しい高等学校学習指導要領（以下、新指導要領と称する）が告示され、翌2019年には、その解説である『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語編』（東洋館出版社、平成31年2月）が刊行された。この新指導要領によって、国語の科目構成は、次のように変化することになる。すなわち、共通必修科目が現行の「国語総合」（4単位）1科目から、「現代の国語」「言語文化」（各2単位）の2科目へ、選択科目が、「現代文A」（2単位）「現代文B」（4単位）「古典A」（2単位）「古典B」（4単位）「国語表現」（3単位）の5科目（実質的には、「現代文」「古典」「国語表現」の三種の科目）から、「論理国語」「文学国語」「古典探究」「国語表現」（各4単位）の4科目への変更である。細分化を進めるこの科目構成の在り方には問題があり、改善されるべき点がある。その改善方法を示すとともに、この指導要領のもとで行われる教科書編集、および教科書検定において留意すべき点を示し、合わせて不人気科目であることが解消されないことが予想される古典教育の改善について提案を行う。

### 2 現状および問題点

新指導要領では、共通必修科目が「国語総合」1科目から「現代の国語」・「言語文化」の2科目へ、選択科目が、A・Bの別を除けば、「現代文」「古典」「国語表現」の三種の科目から、「論理国語」「文学国語」「古典探究」「国語表現」の4科目に分割される。問題点は、科目を分割したこと自体、および分割の仕方に存する。

今回の改訂の柱となるのは、「生徒の主体的な言語活動の重視」であるが、新指導要領は、これを共通必修科目としては「現代の国語」に、選択科目としては実質的にその展開科目である「論理国語」を中心に担わせようとしている（ただし、新旧ともに選択科目として存する「国語表現」は、いま除いて考える）。科目を分割したのは、その「現代の国語」の内容を必ず学ばせ、かつ論理国語を実質的に必修化しようとの意図があると考えられる。

まず共通必修科目を2科目に分断したことに対しては、高校生が生きる実社会と言語文化を切り離し、現代社会を生きることと古典とを分断してしまう結果をもたらすという危惧がある。新指導要領のいう実用的な文章と、同じくいうところの文学的な文章は、これまで以上に緊密な関連のもとに学ぶことが望まれる。

新指導要領における選択科目では、総体的に言えば、「現代文」が「論理国語」と「文学国語」に分割されたととらえることができる。これでは「論理」と「文学」があたかも相反する領域であるかのような誤解を与えてしまう。「文学国語」の設定は、本来生きた現実社会に深く関わるべき「文学」を、伝統文化、狭義の言語芸術に封印してしまう危惧があり、むしろ時代に逆行するものである。また「論理国語」では「論理的な文章」「実用的な文章」を扱うことが明示されているが、これらはいずれも一義的な内容を伝達する文章が

想定されている。しかしそれでは異なる世界観への想像力をはぐくむことはできず、新指導要領が自ら目標とする「思考力、判断力、表現力等」の育成も十分果たせないだろう。

選択科目における古典教育は、「古典探究」が主として担うことになるが、これは現行の「古典A」「古典B」と大きな違いはなく、不人気科目である古典の教育を改善することは困難である。新指導要領の「言語文化」では、古典と現代の文章を積極的に関連づけることを理念としているが、教科書編集もこの理念に基づいて行われるべきである。

### 3 提言の内容

#### (1) 共通必履修科目「総合国語」を設ける

共通必履修科目は、「現代の国語」「言語文化」に分割せず、両者を有機的に統合した「総合国語」1科目とすることを、長期的展望に基づく提言とする。この考え方に則り、短期的展望に基づく提言として、教科書会社には、「現代の国語」と「言語文化」との境界領域を重視した教材選定と、それぞれにかかわる教材を密接に関連させる教科書編集を要望する。同時に、文部科学省の教科書検定に対しては、そのような編集に対して、柔軟かつ弾力的な対応をすることを要望する。

#### (2) 選択科目を「思考と言語」「言語と創造」「言語文化」「国語表現」の4科目とする

短期的展望に基づく提言としては、教科書編集においては、境界領域を重視した柔軟な編集を行い、教科書検定においては、柔軟かつ弾力的な対応を要望する。長期的展望に基づく提言としては、「論理国語」を「思考と言語」（仮称）に、「文学国語」は、「言語と創造」（仮称）に、「古典探究」は、「言語文化」に改編することを提案する。「国語表現」は、新指導要領の性格規定に従い、共通必履修科目で養成された能力に基づき、情報化社会に対処するスキルの習得に留意し、実践的な表現力を養うことを目標とする。

#### (3) 古典教育を改善する

長期的展望に基づく提言としては、上記(2)のように「古典探究」を「言語文化」とし、現代社会と古典との関係を深く理解する教育を提案する。短期的展望に基づく提言としては、近現代・江戸以前を分ける考えから抜け出し、江戸時代をも含めた体系的な言語文化教育を徹底すること、小学校・中学校・高等学校において同じ教材を繰り返し学ぶ利点を重視すること、文字情報以外の聞くこと・見ることを活用すること、古典芸能を積極的に活用することを提案する。

## 目 次

1	はじめに	1
2	提言の背景	2
	(1) 新指導要領の告示	2
	(2) 新設科目とその課題	2
	(3) 諸外国における国語教育	4
3	問題点	6
	(1) 新指導要領における共通必履修科目の問題	6
	(2) 新指導要領における選択科目の問題点	7
	① 「文学」概念と実用主義	7
	② 「論理的な文章」と「実用的な文章」	8
	(3) 古典教育の現状と問題	8
4	提言	11
	(1) 共通必履修科目「総合国語」を設ける	11
	① 語彙	11
	② 話すこと・聞くことの言語活動	11
	③ 教材選定	12
	(2) 選択科目において改善すべき点	13
	① 境界横断的な発想の必要性	13
	② 教科書検定における柔軟な対応	13
	③ 選択科目の設定を見直す	13
	(3) 古典教育の改善——「古典探究」ではなく「言語文化」へ	14
	① 近現代・江戸以前を分ける考えから抜け出す、体系的な言語文化教育 の徹底	14
	② 同じ教材を繰り返し学ぶ利点を重視	15
	③ 文字情報のみが言語文化か——聞くこと・見ることの活用	16
	④ 古典芸能の積極的活用	17
5	おわりに	19
	<参考資料1> 審議経過	21
	<参考資料2> シンポジウム報告	22
	<参考資料3> 大学入学時点での学生の古典意識	23
	<参考資料4> 現状の小中高教科書で繰り返し登場する作品例『枕草子』 の場合	27
	<参考資料5> 現行高校古典教科書における、古典芸能掲載状況	27
	<参考資料6> 中国における古典教育の現状	28

<参考資料 7>	台湾における古典教育の現状 .....	30
<参考資料 8>	イギリスにおける高校段階での国語教育 .....	31
<参考資料 9>	イギリスにおける高校段階での古典教育 .....	33
<参考資料 10>	チェコ、スロバキア、イタリア、アメリカの高校での ギリシア語ラテン語教育 .....	35
<参考資料 11>	ドイツの「ドイツ語」・「ラテン語」教育について.....	36
<参考資料 12>	フランスの高校における国語教育.....	40

## 1 はじめに

日本学術会議言語・文学委員会古典文化と言語分科会は、言語・文学委員会が設定した課題「日本語の将来への提言」のための作業部会として位置づけられる。そして日本および諸外国における国語教育と古典教育について審議することを目的のひとつとしており、第24期もその課題を継続した。

そうした中で、「高等学校学習指導要領」（以下、新指導要領）が2018年（平成30年）3月に告示された。これは、2016年（平成28年）12月に、中央教育審議会が文部科学大臣の諮問を受けて示した答申を踏まえて、現行の指導要領を改訂したものである。また、翌2019年には、その解説である文部科学省編『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語編』（東洋館出版社、平成31年2月）が刊行された（以下、『解説』）。それにともない2022年度（令和4年度）から、高等学校（以下、「高校」と略称することもある）国語の科目編成が大きく変わることになる。本分科会は、この新指導要領の意義を認めつつも、そこにはいくつか重大な問題が含まれていると判断し、議論を重ねた。それをうけて、2019年（平成31年）8月1日には日本学術会議講堂において、分科会主催による「国語教育の将来——新学習指導要領を問う」と題するシンポジウムを開催し、教育関係者、学生、高校生、教科書出版会社、マスコミ関係者など多方面から250名ほどの参加を得た<sup>1</sup>。またその後、数多くの新聞でこのシンポジウムのことが取りあげられるなど、反響も大きかった<sup>2</sup>。この問題にたいする社会の関心の高さを示すものである。

人間が言語を用いて思考し、表現し、行動する存在である以上、国語の教育をめぐる問題は、国語科の問題にとどまらない。言語による思考と論理の習得は「歴史」や「倫理」や「外国語」科目とも関連するだろう。しかし国語による認識、思考、表現を科目の主要な目標として掲げている国語科は、この点でとりわけ大きな役割を要請されている。成人年齢が18歳に引き下げられ、市民としての自覚をより早く求めるようになった現在、高校における国語教育への期待とその重要性はますます高まっている。その意味で、国語科の教育の改善は日本の教育全体の向上に大きく貢献するものと思われる。以上の状況に鑑みて、分科会として高校国語教育の改善に向けての提言を発出する次第である。

なお本提言の作成に当たって、現場の高校教員は直接関与していない。ただし、分科会メンバーには長年教員養成系の大学に勤務した者がおり、現場の高校教員の声は届いていた。また2019年8月1日に「古典文化と言語」分科会が主催したシンポジウム「国語教育の将来——新学習指導要領を問う」には数多くの高校教員が来場し、アンケートにも答えてくれた。彼らの間でも、新学習指導要領の内容に対する疑念や、とりわけ国語科の教科細分化は現場の教員を困惑させるという意見がある。

---

<sup>1</sup> このシンポジウムの報告は日本学術会議のHPに掲載されている。本提言の〈参考資料2〉として再録した。

<sup>2</sup> 『中日新聞』2019年8月25日、『朝日新聞』2019年9月15日、『茨城新聞』2019年9月27日、その他。

## 2 提言の背景

### (1) 新指導要領の告示

『解説』の冒頭「第2節 国語科改訂の趣旨及び要点」の中で引用されている2016年（平成28年）12月の中央教育審議会答申は、高等学校の国語科の課題を次のように指摘していた。

○ 高等学校では、教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり、授業改善に取り組む必要がある。また、文章の内容や表現の仕方を評価し目的に応じて適切に活用すること、多様なメディアから読み取ったことを踏まえて自分の考えを根拠に基づいて的確に表現すること、国語の語彙の構造や特徴を理解すること、古典に対する学習意欲が低いことなどが課題となっている<sup>3</sup>。

ここで求められている、生徒の主体的な言語活動を重視し、そのために語彙を豊かにし、古典の学習意欲を高めるべきという指針については、正当なものと認められる。ただし新指導要領がこの要望に十分応えているかといえば、懐疑的にならざるをえない。

### (2) 新設科目とその課題

新指導要領では、現行の必修科目「国語総合」（4単位）が「現代の国語」「言語文化」（各2単位）に分離し、選択科目として「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探究」（各4単位）が設けられる。現行の「現代文」が「論理国語」「文学国語」の2科目に分けられたかたちになる。しかし高校の国語教育において科目や教科書のレベルで、「論理」と「文学」を截然と分けられるものだろうか。文学作品を解釈し、分析するのは、作品の論理的な構造を把握することを含むはずである。

新指導要領で共通必修科目が2科目へ、選択科目が4科目へと細分化された理由のうち第一のものは、共通必修科目で「現代の国語」を必ず学ぶものとするところにあると考えられる。目標の最初に「実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする」と掲げられたこの科目は、「話すこと・聞くこと、書くこと」に最低でも全授業数の七分の五を充当するよう指示されている（『解説』p.66）ように、実践的な言語活動を中心に行っている。現行の「国語総合」の指導要領でも「話すこと・聞くこと、書くこと」は重視されており、教科書では「表現」の単元で行なうことになっているが、4単位の中の一部であるために、どうしても二義的なものとされやすい。結局「読むこと」が重視され、教材読解の講義型の授業が中心となっていた。この傾向を変え、強制力によって、「話すこと・聞くこと、書くこと」を実践させようとする意図があらうと判断できる。

そのうえで「現代の国語」の展開科目として「論理国語」を設定している。この両者の連繋の緊密さに比べると、もう一つの共通必修科目「言語文化」と、「文学国

<sup>3</sup> 文部科学省「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語編」東洋館出版社、平成31年2月、p.6.



語」および「古典探究」との関係はそれほど密接ではない。しかもレポートや論文の書き方、討議の仕方を学ぶことなどを含み、高大接続の目標にも適合しやすい「論理国語」は、選択科目の中でもおのずと優先度が高くなる。つまり選択科目である「論理国語」を優先的に学ばせようとし、実質的に可能な限り必修に近づけようとしているのである。

今回の改訂の柱となるのは、「生徒の主体的な言語活動の重視」であるが、「新指導要領」は、これを共通必修科目としては「現代の国語」に、選択科目としては実質的にその展開科目である「論理国語」を中心に担わせようとしている（ただし、新旧ともに選択科目として存する「国語表現」は、いま除いて考える）。主体的な言語活動は、とくに「話すこと・聞くこと」および「書くこと」の領域に顕在化する。まず共通必修科目では、「話すこと・聞くこと」の授業時数は、「現代の国語」に20～30単位時間が割り振られているのみで、「言語文化」には無い。「書くこと」については、「現代の国語」が30～40単位時間、「言語文化」が5～10単位時間である。選択科目では、「書くこと」について「論理国語」が50～60単位時間であるのに対して、「文学国語」は30～40単位時間である。明らかに「言語文化」「文学国語」は主体的な言語活動において軽視され、「読むこと」に偏重している。

この考え方の問題点は、「話すこと・聞くこと、書くこと」という言語活動にしても、「論理的な理解力・表現力」にしても、それ自体で独立して存立するわけではなく、内容と深く関わっていることを視野に入れていないことである。科目を細分化することは、中身を伴わない、言語活動のための言語活動、論理のための論理を奨励することにつながる危惧があるのである。

新指導要領には、高校国語の目標として次の3点が明記されている。

- 1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
- 2) 生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を伸ばす。
- 3) 言葉のもつ価値への認識を深めるとともに、言語感覚を磨き、わが国の言語文化の担い手としての自覚をもち、生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う<sup>4</sup>。

社会との関わりの中で、主体的な思考の深化・展開や国語の能力の向上を図ることが目指されていると言ってよいだろう。だが、科目をあまりに細分化することは、そうした社会性・主体性の十全な育成を阻害する危険をはらむのではないかと危惧される。国語の主体的な使用を可能にするには、一方で言葉を内面化し、他方で言葉を相対化するような視点が不可欠だからである。

---

<sup>4</sup> 文部科学省「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語編」東洋館出版社、平成31年2月、p.21.

現代社会で通用している言葉は、歴史的な経緯をもち、すべてそれとの相関によって意義づけられるのであり、逆に古典などの歴史的な言葉は、現代的な言葉とのつながりを示されることによって、生き生きと再生するのである。そのような相関を知り、相対化を経験することこそが、生徒の主体的な学びの核心である。そのかぎりでの科目としての「古典探究」を改めて位置づける必要があるだろう。

### (3) 諸外国における国語教育

各国の生徒たちの「読解力」を比較した国際調査として、経済協力開発機構（OECD）が3年ごとに、15歳を対象に実施している学習到達度調査（PISA）がある。その結果によると、2015年、日本の生徒の読解力は国際的には高い平均点を示す上位グループに属していたが、2012年の調査と比較して平均点が低下した<sup>5</sup>。また同じくPISAの最新結果（2019年12月に公表された2018年の調査結果）では、日本の生徒の読解力は平均点、順位ともさらに低下した<sup>6</sup>。こうした調査結果に過剰に反応する必要はないが、内容にたいする判断力、自分の考えを表現する力の低下が見てとれることは、不安な要素であり、これらの能力の改善に向けての取り組みが求められよう。そして広い意味での読解力の育成に国語科が決定的な役割を果たすことは、贅言を要するまでもない。

もちろんその読解力は、義務教育の課程を含めて考えられなければならない。小学校・中学校の国語においては、新・旧いずれの指導要領においても、科目が分かれていることはない。「論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を養い…」（新指導要領中学第3学年の学年目標（2））などとあるように、論理力と想像力・共感力は連動して目指されている。高校で分断してしまっ、義務教育との連携をも弱めてしまっているのが、新指導要領の欠陥である。

こうした状況も踏まえ、日本の高校における国語教育の現状と課題を考察するにあたって、諸外国の事情を知っておくことは有益だと思われる。諸外国の国語教育の理念、カリキュラム、教科書などについての情報は、日本の高校国語教育を再考し、改善するに際して参考となる部分が少なくないからである。

本分科会には外国文学研究を専門とするメンバーが含まれており、今回の提言作成を機会に、諸外国の高校における国語教育および古典教育について調査をおこなった。その報告を本提言の末尾に〈参考資料6〉～〈参考資料12〉として収録する。なお、高校教育システムは国ごとに特色があって微妙に異なるので、〈参考資料〉で報告されているのは大雑把に日本の高校に相当する教育の現状であると認識していただきたい。また「国語」とはその国における主たる公用語、欧米諸国における「古典語」はギリシア・ラテン語を指すと理解していただきたい。

<sup>5</sup> 文部科学省「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語編」東洋館出版社、平成31年2月、p.6.

<sup>6</sup> 『朝日新聞』2019年12月4日。

詳細は<参考資料>にゆずるとして、諸外国の高校の国語教育においては古典教育がかなり重視されていること、またイギリス、ドイツ、フランスの高校国語教育においては、近代の文学作品を解釈し、それについて論じることが大きな比重を占めていることが分かる。この場合文学とは、詩歌、小説、演劇、随筆、批評ばかりでなく、広く哲学、社会思想など人間と社会と世界について考察した著作も含む。そこでは文学／論理、文学／実用という二分法の考え方はなく、言語を用いてあらゆる問題を考察し、分析し、それについて自分の考えを表現する術を習得することが目標とされている。

<参考資料>にある本分科会の会員の報告に示されているように、PISA において読解力が日本と同じレベルにある国々においては、高校国語教育において文学と論理を分離したり、科目を細分化するという状況はない。それらの国では、広い意味での文学が国語教育の基盤にある。したがって日本の子供の読解力の低下を、国語教育における文学の偏重に帰するかのような文部科学省の姿勢は妥当性を欠く、と本分科会は考える。<参考資料>として諸外国の例を挙げたのは、そのためである。

### 3 問題点

#### (1) 新指導要領における共通必修科目の問題

平成 30 年に告示された「高等学校学習指導要領」のうち、現行指導要領に対する改訂点で、もっとも大きなものは、共通必修科目の相違である。すなわち、現行指導要領では共通必修科目として「国語総合」（4 単位）1 科目を設定しているのに対して、「現代の国語」（2 単位）「言語文化」（2 単位）の 2 科目を新設しているのである。結果的に、共通必修科目 4 単位は、二つの科目に分離されることとなった。この 2 科目の新設について、『解説』では、次のように述べられている。

「現代の国語」については、主として「話し合いや論述などの『話すこと・聞くこと』、『書くこと』の領域の学習が十分に行われていない」という課題を踏まえ、特にこうした課題が実社会における国語による諸活動と関係が深いことを考慮し、実社会における諸活動に必要な資質・能力を育成する科目として、その目標及び内容の整合を図った。

一方、「言語文化」については、主として「古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらない」という課題を踏まえ、特にこうした課題が、古典を含む我が国の言語文化への理解と関係が深いことを考慮し、上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深める科目として、その目標及び内容の整合を図った<sup>7</sup>。

そのうえで、これら 2 科目を新設した理由については、「これらの科目を、それぞれの課題を踏まえた、これからの時代に必要とされる資質・能力を明確にした科目として設定することにより、高等学校国語科の課題の確実な解決を図るためである。」と述べている。それぞれの目標とする内容が、削減されたり省略されたりすることなく、確実に学習されることを意図しているといっていよう。だが、2 科目を分離してしまったことは、その趣旨を生かす方途を自ら制限する自己矛盾を犯している、と考えられる。例えば、「現代の国語」では「実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力を育成する」（『解説』p. 10）ことを目指し、「言語文化」では「生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付ける」（新指導要領）ことを目指すとともに「社会や自分との関わりの中で」（『解説』p. 10）言語文化を生かしていくという目標が語られている。ともに「社会」の語が共通し、しかもそこに大きな力点が置かれている。こうした科目が別個に設定されることは、むしろ本来の趣旨に対して有効な教育を行えないことが危惧される。高校生が生きる実社会と言語文化とを切り離し、現代社会を生きることと古典とを分断してしまう結果となるからであ

<sup>7</sup> 文部科学省編『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 国語編』東洋館出版社、平成 31 年 2 月、p. 10。

る。現代のいわゆる実用的な文章と、いわゆる文学的な文章および古典の文章は、これまで以上に緊密な関連のもとに学ばれることが望ましい。

## (2) 新指導要領における選択科目の問題点

### ① 「文学」概念と実用主義

生徒の身につけるべき学力を予め明確化し、それを学習者、指導者双方が目標として共有する、という新指導要領の方針はきわめて正当なものである。だが、それにとられるあまり、学力の性格を要素別に細分、項目化し、科目ごと、教材の性格ごとにこれを切り分け、一覧表に構成を示す「要素還元主義」が弊害を生み出している。『解説』の「第1章 総説」(p. 26～p. 67)の40ページに及ぶ分類表がその一例で、ともすれば「分類のための分類」に傾く傾向が生じ、結果的に、個別具体的な人間の営みへの対応を迫られる教育現場に負担を強いることになるのではないだろうか。

こうした弊害は、従来の「現代文」に該当する新科目編成にも表れている。たとえば選択科目において「論理国語」と「文学国語」の科目分けを行ったことにより、「論理」と「文学」があたかも相反する領域であるかのような誤解を与えてしまう可能性がある。『解説』では、教材となるべき文章が「論理的な文章」「実用的な文章」「文学的な文章」の三者に大別できることが前提になっている。だが、実際にはすぐれた教材ほど自然科学、社会科学、人文科学それぞれに境界横断的に関わっており、学際性の高い文章ほど、自然科学的、社会科学的「論理」と文学を含む「人文知」とは融合している。したがって上記の三分区を前提としてしまうことには大きな危険が伴うのである。

「文学」の語は日本語の歴史と共にあり、本来は文字で書かれた学問に対する総称であった。それが18世紀のロマン主義以降に狭義の言語芸術に転用されるようになったいきさつがあるが、1980年代以降、そのことへの反省から、あらためて社会、文化に広く関わる概念として総合的に考察する研究が進んでいる。こうした中で、「文学国語」の設定は、本来生きた現実社会に深く関わるべき「文学」を、伝統文化、狭義の言語芸術に封印してしまう危惧があり、むしろ時代に逆行するものである。

「文学」を学ぶことは言葉の「わかりがたさ」「伝わりにくさ」を通し、多種多様な他者への想像力を養う営為にはほかならず、安易な実用主義を相対化するための手立てとして、次回の指導要領改訂においては、あらためてその意味が見直されなければならない。

なお、このような「文学」と「論理」を分断してしまうことへの問題性については、「高等学校国語・新学習指導要領に関する見解」として、日本文学関連の主要な16の学会が連名で、2019年8月11日付けで見解を発表している。本提言もその趣旨を視野に入れたものであり、情・理を融合させた「総合国語」の理念を提唱したい。( <http://amjls.web.fc2.com/amjls/kenkai.pdf> )

## ② 「論理的な文章」と「実用的な文章」

『解説』では、「論理国語」について、「内容の〔思考力、判断力、表現力等〕の「B読むこと」の教材は、「近代以降の論理的な文章及び現代の生活に必要とされる実用的な文章とすること」（p. 175）とされている。さらに、その「近代以降の論理的な文章」は「明治時代以降に書かれた、説明文、論説文や解説文、評論文、意見文、学術論文などの論理的な文章」（p. 175）とされ、「実用的な文章」は「報道や広報の文章、案内、紹介、連絡、依頼などの文章や手紙のほか、会議や裁判などの記録、報告文、説明書、企画書、提案書などの実用的な文章、法令文、キャッチフレーズ、宣伝の文章」（p. 176）とされている。

こうした分類からうかがえるのは、「思考力、判断力」は「論理的な文章」で学び、「表現力」は、広報、案内、企画書などの「実用的な文章」の実践を通して習得する、という発想であろう。しかし、「表現力」は「論理的な文章」からでも学ぶことができるはずであり、「思考力、判断力、表現力等」は本来一体のものであるはずである。教材を「論理的な文章」と「実用的な文章」とに弁別することの無理がこうした点にも表れているのではないか。

「実用的な文章」に関して言えば、そこに挙げられている例は、「キャッチフレーズ」を除いて基本的には一義的な内容を伝達する文章群である（「キャッチフレーズ」はさまざまなイメージを伝達する、多義的な文章である。たとえば「おいしい生活」というフレーズは、消費社会を促す表象であると同時に、豊かな生活をもたらす多幸感の表象でもあったように、多義的な意味を担わせて人々の欲望を喚起する。）

また、ここに挙げられている「論理的な文章」も、基本的には論理的に整理できる、一義的な内容を把握する文章が想定されているように思われる。もしもこうした前提に立って「思考力、判断力、表現力等」を養成することがめざされるならば、「読むこと」を通して異なる世界観への想像力を育むという、本来あるべき思考がなおざりにされてしまうのではないだろうか。「情報」として「操作」「処理」しやすい対象が優先され、人間の感性、想像力に関わる領域が結果的に軽視されるようなことがあってはならないであろう。

## (3) 古典教育の現状と問題

平成 17（2005）年度に国立教育政策研究所によって行われた、高等学校第三学年を対象とする「教育課程実施状況調査」によると、高等学校において古典嫌いの生徒は 7 割を超えている（国立教育政策研究所ホームページ <https://www.nier.go.jp>より。この時以来同種の調査は実施されていない）。このことを重視して平成 23（2011）年度より小学校において「伝統的言語文化教育」（以下、「伝文」と略称）が開始された。開始から 10 年、現在はその成果が問われつつある。そのタイミングで高等学校の国語教育が大きく変わる。実は「伝文」の重視は高等学校国語には大きく波及せず 10 年

が経過した。教科書も平成 15（2003）年度から実施された「国語総合」「古典A」「古典B」において新しいタイプの教科書が作成されて以来、大きく変わらずに現代に至っている。

国立国語政策研究所の実態調査と軌を一にして、横浜国立大学教育学部では、新入生を対象に、2007 年度から 12 年間、「古典力」アンケートが実施されてきた（詳しくは＜参考資料 3＞を参照されたい）。その結果、教員養成系学部所属の学生たちの抱えている古典を教えることに対する不安は、約 6 割が古典をあまり読んでいないことであり、これまで受けてきた高等学校での古典の授業への不満としては、「文法ばかり」が圧倒的に多く、約 8 割にも及ぶ。第二位が「現代語訳の暗記ばかり」である。これから教員になる学生たちが、そもそも面白い古典の授業を経験していないのである。古典を知らない、古典に関心の無い生徒が、大学入学以前に大量生産されている。小中高の教師の多くが、すでに古典嫌い・苦手意識を持っている。そして受験に必要ということを理由とした、品詞分解と固定的な現代語訳の押しつけ的な授業が繰り返され、近年はさらにそれが助長されている。古典の解釈や文法は、一義的に答えを限定することが可能であり、それゆえ定期試験や入学試験でもそうした問題が重宝され、無味乾燥な置き換え的解釈や些末な文法事項が問われやすいからである。

平成 14（2002）年度以前は「現代国語」と「古文」「漢文」に分かれていたので、教師もそれぞれの専門性を活かし、担当を分担する場合も多かった。「古文」なり「漢文」なりに関する教材を重点的に学び、自分なりの「古典観」や見識を持ち、それを伝える授業のできる教師によって、担当されていたのである。「国語総合」の導入により、まずその体制が崩れた。1 年生の教育において、古典を専門的に学んだことのない国語教師も、古典を教えることになってしまったのである。「古典は苦手」と感じている教師による、古典教育の弊害が生まれる。そのまま 2 年生で選択される「古典A・B」は、受験用と位置づけられてしまい、受験に有利なてっとりばやい教授法が、徹底的な品詞分解と、固定的な現代語訳の暗記であり、それによって生徒の大半が古典嫌いになってしまったといえる。

今回、1 年次必修の「言語文化」が、その失敗を是正する形で提案されたと推察されるが、選択科目である「古典探究」「文学国語」との関連性が不明確な点に問題がある。これまで古典は全員必修であったが、新指導要領では選択科目の一つである。現実的には受験科目として古典が必要な場合に「古典探究」を選ぶ場合が増えると予測されている。科目の説明内容は「古典B」とほぼ同じであり（新指導要領「国語第6 古典探究」）、これまで以上に受験のための古典教育となってしまう懸念がある。

せっかく魅力的な「言語文化」と 1 年次で出会っても継続性がない。受験用と考えてしまっただけではこれまでと変わらない。教師も生徒も楽しく面白いと思えるような授業へと、発想自体の転換が必要である。もちろん古典という科目は、試験と密接な関係がある。国語の試験問題の中では、比較的客観的な解答が可能だからである。しかし今後は、そのような試験のための科目とは異なる、古典学習の意味付けが求められ

る。方向性のみ示せば、それは「リテラシーを育成するための科目」としての意味付けが考えられる。古典は、我が国の言語であり文化であるが、また学習者にとっては、半ば異言語であり、半ば異文化である。逆にいえば、異言語・異文化を知る学びの訓練となる。そしてそのような異言語・異文化体験の中で、本当の意味で深く我が国の言語・文化を知ることが期待されるのである。



## 4 提言

以下では、前節で指摘した諸問題を解決するための提案を、(1)共通必修科目、(2)選択科目、(3)古典教育、に分けて具体的に述べる。

### (1) 共通必修科目「総合国語」を設ける

新たな共通必修科目として「総合国語」の理念を提案し、その理念に基づいた、柔軟な教科書編集と教科書検定を提言する。そして次期学習指導要領に向けては、共通必修科目として、「現代の国語」「言語文化」を有機的に統合した、「総合国語」1科目を提言する。これを長期的展望のもとでの提言だとすれば、その理念に則って、以下を短期的展望に基づく提言とする。教科書会社には、「現代の国語」と「言語文化」との境界領域を重視した教材選定と、それぞれにかかわる教材を密接に関連させる教科書編集を要望すると同時に、文部科学省の教科書検定に対しては、そのような編集に対して、柔軟かつ弾力的な対応をすることを要望する。

共通必修科目に関する提言について、3つの側面から具体的に例示する。①語彙、②話すこと・聞くことの言語活動、③教材選定、の3側面である。

#### ① 語彙

新指導要領では「語彙指導の改善・充実」が、改善点の柱の一つとして挙げられている（『解説』p.11）。「現代の国語」に関して、ただ量的に語彙を増やすのではなく、「語句や語彙の構造や特色、用法及び表現の仕方などを理解し、話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること」が目指されている。

「語彙の構造」とは、「語句相互の関連性のこと」と解説されている（『解説』p.75）。「言語文化」でももちろん語彙を豊かにすることは求められているが、この両者の語彙はけっして分離できないし、分離することは有効ではない。むしろ、現代の語彙の構造は、古典の語句を知ることによって相互に関連性をもつことを発見できることがしばしばある。語と語は歴史的な用法が基盤となって、関係性や語彙体系をもつからにはほかならない。現代語と古典語を積極的に関係づけることによって、生徒の主体的な理解も深まるに違いない。新指導要領のもとでの授業においても、現代語と古典語を深く関連付けるような教材が採用され、またそのような言語活動が行われることが望ましい。

#### ② 話すこと・聞くことの言語活動

新指導要領の「第1 現代の国語」の〔思考力・判断力・表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」のAについて、『解説』は海外の姉妹校との交流で「日本文化」に親しむための企画の内容を話し合うという言語活動を例示している（p.83～84）。適切な言語活動と思われるが、ここで「日本文化」とあることに注意したい。「日本文化」の中核となる「言語文化」との関連性が生じているのである。たまたま話題が日本文化であったともいいがたい。こういうテーマは、政治・経済・宗教・社

会に直接関わる問題だと、生徒それぞれの立場・知識・関心の差異によって、対等な議論になりにくく、また社会科で行うのにふさわしいテーマであることもある。国語の学習としては、文化に関わるテーマが選ばれる蓋然性はかなり高いといえよう。生徒たちにとっても身近で、自己省察を促す所もあり、国語の活動にふさわしい。やはり「日本文化」について調査・考察することは、「言語文化」と密接に関わるのである。「現代の国語」と「言語文化」は統合されて、なおかつその内部の、現行指導要領における現代文や古典のそれぞれに該当する単元や教材も、緊密な連繋のもとに学ばれるべきである。長期的視野における提言として、「総合国語」を提案した理由である。

新指導要領のもとの教育においても、短期的な視野における提言として、たとえば「言語文化」「現代の国語」「古典探究」は緊密な連繋をもって学ばれるべきである。たとえば「言語文化」において、能「井筒」を、観劇なども含め視聴覚教材を活用した言語活動によって古典に親しませることを重視して学び、「現代の国語」でそうした学習を踏まえて、外国人に能「井筒」を紹介する方法を考え、「古典探究」で、さまざまな古典作品を踏まえて作られた能作品の文章をもとの古典と比べながら読み解きつつ、その劇構造などを考察し、そのうえで能など古典芸能を論じた評論文を合わせて学ぶ（「文学国語」および「論理国語」との関連付け）などの連繋をもたせた教科書や言語活動が考えられる。このようにすれば、「言語文化」「現代の国語」「文学国語」「論理国語」「古典探究」の各科目に有機的な連関を持たせることが可能になる。こうした活動は、選択科目「古典探究」が、現行指導要領の古典Bとあまり違いがなく、科目として孤立的であるという欠点を改善することにもつながるはずである。

### ③ 教材選定

新指導要領では分離・分割されることが問題となる、境界領域にある教材の重要性を述べる。境界領域にあるような教材は、生徒たちにその教材での学習の意義をより高めることが期待される。一例を挙げれば、山崎正和「水の東西」は、現行の「国語総合」において、評論分野の教材として複数の教科書で採用されている教材である。二項対立による論理展開は堅実で、論理的文章の典型ではあるが、また文学的な想像力を喚起する面もち、随想の要素もある。つまり境界領域的な文章である。それだけではない。流れる水に日本的な時間意識を見るところなど、『方丈記』の冒頭部分なども想起させる。あるいは「もののふの八十字治河の網代木にいさよふ波のゆくへしらずも」（万葉集・巻三・二六四・柿本人麻呂）などを挙げつつ、日本的な無常観に話を展開させてもよい。逆に言えば、古典を学ぶことの現代的意義につなげることが可能になる、ということもできるのである。

このことは、古典においても非常に重要な意味を持つ。古典に興味を持ってないという生徒の多くは、現代においてそれを学ぶ意義が見いだせない、ということがしばしば理由になっているからである。たしかに「言語文化」は、古典と近代以降の

文章を関連づけている点で、現代文と古典が実質的に分離している現行の教育課程の実情を、改善に向けて一歩進めようとしており、その点は評価できる。しかし一方では、古典と「現代の国語」で取り上げるべく示されている論理的な文章、実用的な文章との関連は断ち切られている。むしろ両者を積極的に関連づけることで、学習者の古典を学ぶことのモチベーションを高めるはずである。

## (2) 選択科目において改善すべき点

### ① 境界横断的な発想の必要性

先に触れた科目の細分化がはらむ「要素還元主義」を克服するためには、何よりも境界横断的な発想が求められる。今後重要なのは個々の教材の持つ可能性を最大限に引き出していく柔軟な発想であり、既成のジャンル認識を越えた学際的な「知」が目標に掲げられるべきであろう。「論理国語」の教材もまた、「論理的な文章」や「実用的な文章」に閉ざされることがあってはならない。その意味でも、今後、多義的把握を可能にする文章を「話し合い」の教材として採用し、生徒の「書くこと」や「話すこと・聞くこと」に関わる力を養成していく必要がある。

### ② 教科書検定における柔軟な対応

今後教科書検定を通し、行政は新指導要領にそって「論理」「実用」「文学」の基準に沿った判断を強いられるが、現実にはそれはきわめて困難な事態であるといわなければならない。新指導要領で区分された「論理国語」「文学国語」「古典探究」「国語表現」の教科書の編集にあたっては、境界領域を重視した柔軟な教材選定・編集が求められる。また文部科学省の教科書検定に際しては、これらの点に関する柔軟かつ弾力的な対応を要望したい。

### ③ 選択科目の設定を見直す

今後の指導要領の改訂にあたっては、今回選択科目で示された「論理国語」「文学国語」「古典探究」「国語表現」の区分に代わる、科目相互の連携を活かした、新たな選択科目を提案する。具体的には次のとおりである。

「論理国語」を「思考と言語」（仮称）に改編することを提案したい。「思考と言語」は、古典から現代までのあらゆる時代を範囲とし、実用的、論理的、文学的といった区分にこだわることなく、問題提起的で、伝達性に富む教材が求められる。内容を対比、整理、評価、考察した上で、論理的に構成して発表する、言語活用の過程を重視した学びを目標とする。

「文学国語」は、「言語と創造」（仮称）に改編することを提案したい。「言語と創造」は現代における、広い意味での思想性の高い文章（古典を含むことを妨げない）を教材とし、言葉の多義性に対する関心や想像力を育てていくことを目標とする。「思考と言語」が言語活用の方法と過程を重視するのに対し、「言語と創造」は異質な他者や世界観への想像力を育てていくことを目標とする。

「古典探究」は、「言語文化」に改編することを提案したい。「言語文化」は、我が国の伝統的文化を学ぶことになるが、従来のように平安時代や中世だけではなく、近世や近代の文章も積極的に教材として取り込み、伝統文化がどのように継承されてきたか、また現代を生きる我々にどのような意味を持ちうるのか、について思索を深めていくことを目標とする。

現行の「国語表現」は、新指導要領の性格規定に従い、共通必修科目で養成された能力に基づき、情報化社会に対処するスキルの習得に留意し、実践的な表現力を養うことを目標とする。

### (3) 古典教育の改善——「古典探究」ではなく「言語文化」へ

古典嫌い・無関心を大量に作り出している主な要因は何か。それは教師側にも生徒側にも根強く存在する、品詞分解と現代語訳に終始する固定的で受動的な授業形態にある。このような押しつけ的授業から抜け出す工夫をし、柔軟な発想を導入した改革が必須である。

大切なことは古典も含めた言語文化の世界が、自分とどのような関係を持っているのか、共通点・相違点を理解して、自己の世界観を拡大させることにある。現代社会においては、教師も生徒も日常生活において伝統文化に親しむ環境が希薄になっている。いきなり難しい文字テキストで、自分との関わりが見えない昔の人の文章を教え、学ぶ抵抗感を少なくする配慮が必要である。それは個々の教師に任せて済むレベルではなく、文科省が率先して導き、教科書やその指導書において、古典世界との橋渡しの方法を示していく必要がある時期に来ている。

#### ① 近現代・江戸以前を分ける考えから抜け出す、体系的な言語文化教育の徹底

現状は平安文法で古文を読み解いていくという固定的な教育法が定着しているが、本来言語も文化も各時代で個別に存在するのではなく、連綿と繋がった時の流れに従って、継承され変化し続けているものである。近現代文学と古典文学に垣根を作らず、現代の視点から連続性と差異に注目しつつ、古典を探究する意識を導入することによって、古典教育の抱えている問題の多くは解決できる。

例えば文法教育に関して言えば、古文を正しく理解するために、文法の知識は必須である。しかし現状のように、ひたすら品詞分解して、正解を暗記するというだけでは、せっかく覚えた文法の知識はあまり役に立たない。

丁寧な品詞分解による文意の確認が精読には不可欠という考え方は、平安中期文学研究者に特に顕著な傾向ではないだろうか。確かに『源氏物語』をその頂点とする平安文学は、平安文法による読解で裏打ちすることで、精密な読みが実現できるのだろうし、そうしなければ読み解けない難解な文章でもある。

しかし、中世・近世文学の場合、平安文法が崩れている文体であり、また芸能のように文章を読み解くという方法でなく、耳から聞き目から見るという情報理解で鑑賞する方法も多く登場する。『徒然草』のような擬古文はさておき、中世・近世文

学の場合、口語文法の知識でもおよその文意は把握できる場合が多い。それらは厳密に一言一句理解しようとするのではなく、大量に一気に読んでいくことで、古文の世界に慣れ、総合的に文意を理解する読み方が適している文章である。

古典文学の代表的な名文を、文法的な確認も含めた訓詁注釈的な教授法によって精読する方法を核としつつ、品詞分解的な文法力に頼らないで文章を読み解く訓練、現代語訳せずに古文のまま理解する読解法も併用していくべきであろう。それによって文体、表現法、表現内容の違いや変遷にも意識が及ぶ。明治期の擬古文体、例えば樋口一葉や森鷗外の作品を読み解く難しさを江戸期の作品に連続させることによって、文体は古文であっても内容は近代的であることに気付くことができる。文法の学習においても、口語文法との関連の中で捕らえることによって、文語が特殊な言葉であるという意識を軽減させる効果がある。

平安文法とも関わるが『源氏物語』は高校生にとって難解だという指摘があり(勝又基編『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』文学通信、2019年9月)、現代語訳や漫画本を使用することも行われている。『女源氏教訓鑑』(山本序周著 正徳3年〈1713〉刊)は、『源氏物語』五十四帖の各巻に挿絵を添えて梗概を記した入門書である。この種の『源氏物語』ダイジェスト版は『十帖源氏』『おさな源氏』など他にもあるが、まずはこうした入門書から入るのも一案である。例えば『源氏物語』の入門教材として共通必修科目「総合国語」で扱い、選択科目「言語文化」で『源氏物語』原文と比較させる、といった段階的取り扱いも可能である。江戸時代の源氏理解の実態を知ることによって、1000年という原作との時代の隔たりを確認することにもなるし、平安時代と現代とを繋ぐ仲立ち的な江戸時代の存在に注目するきっかけともなる。江戸時代の文章は平安時代の物に比べて遙かに理解しやすいことも体験できる。

そもそも、平成29年3月に告示された小学校・中学校学習指導要領国語における改訂のポイントの一つに、直前の改訂で登場した「伝統的な言語文化」の特化を止め、広く「言語文化」の中で古典も扱うという基本方針を打ち出した点がある。今回の高等学校学習指導要領もそれを継承しており、国語教育における「言語文化」教育を児童・生徒の成長に合わせて行う方針が体系化されたといえる。この方針を貫くのであれば、新指導要領の教科区分は不徹底の感が否めない。

## ② 同じ教材を繰り返し学ぶ利点を重視

小学校から繰り返し習う古典作品が存在する。枕草子初段・竹取物語・百人一首、平家物語冒頭・徒然草序・奥の細道序文などである(＜参考資料4＞を参照)。小学校の教科書における掲載が増える傾向にあるし、中高で重複する教材はもっと多い。この事実にもっと注目する必要がある。

新指導要領における古典関連の項目では、小学校段階では「言葉の響きやリズムに親しみ、昔の人のものの見方や感じ方を学ぶ」とされ、中学校ではさまざまな「古典の世界に親しむ」(1・2学年)、よく知られている物を「引用して使う」(3

学年)とされている。このように義務教育段階で親しみを持ってきた古典作品を改めて高校で扱うように、位置づけられているのである。高校の教師は小・中学校で何をどのように学んできているのかを考慮しつつ、それをうまく活用しながら授業を展開させる必要があるだろう。

これら同じ教材を違う年代で繰り返し学ぶ利点は、過去と現在の理解の差を確認できること、難しいというハードルをあまり感じずに作品と向き合える体制が整うということにあるだろう。発達段階に応じた取り上げ方が重要であり、教員側が連続性と変化を自覚している必要があるが、教員・生徒個々のオリジナリティーを重んじた授業展開が得られやすいという利点もある。この連続性をどう教育の中で活用していくか、現状では、前段階で習っている場合、取り上げないで済ませる教師が多い。

小中高教育の連携に関して、小中高教員と教員養成の大学が、もっと積極的に情報交換し、長期的展望に立った教育を実現していく必要があるだろう。

### ③ 文字情報のみが言語文化か——聞くこと・見ることの活用

文法と固定的な現代語訳の暗記という受動的な授業ではなく、古典世界に馴染み、興味を持てる手段として、文字情報だけに頼らない方法がある。新学習指導要領が確定するまでには、「話す・聞く、書く、読む」の3領域に加えて、昨今の視聴覚教材の充実に鑑み、目や耳から入る情報による理解や発信を取り入れようという動きも見られたのだが(中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「国語ワーキンググループ 第四回議事録」、藤森裕治氏の発言、2016年2月、現在はホームページ上からは削除)、最終的には従来通りの3領域内に納められてしまった。

現代社会においては、聞いたり見たり体験したりすることから、さまざまなものを学ぶ機会が多く、そういう情報収集に生徒は長けている。それを積極的に学校教育の場に導入して、古典、すなわち異文化への抵抗感を少なくする教育法を積極的に導入していくべきであろう。そしてその方法を小中高と連続させて、理解の深化を図っていくことが大切である。五感のすべてを使って慣れ親しむ教育法を、文科省は率先して開発していくべき時が来ている。現代社会に即した魅力的な「言語文化」の授業展開には、自由で大胆な発想が必要だが、そこには従来とは異なった聞くこと・見ることの活用が有効であろう。

『百人一首』の朗詠を聴かせ、光琳カルタの取り札の絵を見せて鑑賞させる試みがある(小林和馬「聞くこと」で広がる和歌の世界—『百人一首』を用いた小学校の伝統的な言語文化の授業—、『横浜国大言語研究』、第36号、2018年)。古文・古語・古い時代の文化などに対して、年齢が低いほど抵抗感がなく、理解のためのハードルが低い。小学1年生に和歌を聞かせてどの程度理解するか試すなどという実験自体、従来は行われたことがないであろう。現場の教師にその発想がないのも事実だが、教科書にもそのような試みはどこにも触れられていないし、指導要領やその解説でも、そのような教育法に関する発想が欠落している。どの時期にどの歌

を用いるか、児童・生徒の生活や学年歴も考慮して取り扱う必要があるが、より重要なことは、繰り返し学ぶ効果、学年による連続性への配慮であろう。「低学年の児童には古文は難しい。まして和歌などとんでもない」と考えるのは、大人の教師の方で、子供達は抵抗なく耳で聞いて和歌の世界を感じ、大事なところをキャッチして、ほぼ正確に理解する。学年に応じたこのような体験を積み重ねることによって、抵抗感をあまり持たずに、文字情報無しで古典世界を理解する経験が積み重ねられていく。親しむという経験値によって、古典摂取が実現されていく。

古典に親しむという観点から、江戸時代の庶民がどのように古典を学んできたかという発想が援用できる。漢学者江村北海(正徳3年〈1713〉～天明8年〈1788〉)は『授業編』(10巻5冊、天明3年〈1783〉刊)巻之一「幼学」の項において、子供を読書好きにするのに与えるべき書として、『絵本故事談』、絵入百科事典の『訓蒙図彙』、漢籍の『二十四孝』、日本の『年代記』『庭訓(往来)』『節用集』『曾我物語』『平家物語』等の絵入本をあげている。まずは絵を見ることで興味を持たせ、和漢にわたるバランスの良い教養形成を求めている。

例えば宮川道達著『訓蒙故事要言』(10巻10冊 元禄7年〈1694〉刊)や、前述山本序周著『絵本故事談』(8巻9冊、正徳4年〈1714〉刊)といった「和製類書」(日本で作成された和漢の故事を集成・分類した参考書)は、見出し語・出典名を明記している。これを教材とし、出典名を手掛かりに索引を利用して生徒に原典に当たらせる、といった活動が可能である。

#### ④ 古典芸能の積極的活用

「言語芸術の作品は文字テキストで読む」という教授法に特化したのは、近代以降であろう。学校教育の中で、国語の教材として文学テキストが主要な役割を果たすようになって、その傾向が決定的になった。しかし歴史的に見れば、言語文化的な作品は種々多様な形態で発信され、享受されてきた。そのことを国語教育の中でもっと重視すべきであろう。

その一つに古典芸能がある。現行指導要領では教えるべき項目に「古典芸能」が含まれているにもかかわらず、作品そのものが教科書に採用されていない(＜参考資料5＞を参照)。内容が難しすぎる、古文ではないなどの意識であろうか。現場の教師たちが嫌煙するというのも事実であろう。このような傾向を踏まえてなのか、新指導要領では「言語文化」で扱うものに「芸能」が含まれるが、「古典探究」にはない。

しかし古典芸能は伝統的な日本文化の宝庫であり、古典文学の引用や翻案なども多い。能や歌舞伎には『古今和歌集』『伊勢物語』『源氏物語』『平家物語』など、高校の定番教材である古典文学が利用されているので、それらと関連付けて授業を展開すると、比較することの面白さを実感できるという利点もある。すぐれた心理描写も多く、独特の言い回しをはじめとして、古い時代の言語感覚に慣れるには便利な教材である。しかも舞台映像を楽しみながら、古典世界に慣れ親しむことが可能

なので、知らないうちに経験している効果は絶大であろう。昭和末年ころまでは、日常的に親しむ古典世界がまだ多く存在していたのだが、令和の現在、特別な環境に育っている場合以外は触れることなく成長する子供たちである。日常生活と古典世界との橋渡しの役割として、古典芸能は活用できる。

例えば『平家物語』「那須与一」は、狂言「奈須与市語り」として、ほぼ全文が所作付きの語り芸として伝えられている。これを見せてから『平家物語』の文字テキストに入っていく。導入としてまず親しむこと、それには視聴覚教材の利用は最適である。現場の教師にその知識がない、情報を知らない、視聴覚教材が高すぎるなどの問題が多い。文科省が率先して視聴覚教材の古典教育への応用を提唱する必要がある。



## 5 おわりに

2018年（平成30年）3月に告示された「高等学校学習指導要領」はさまざまな反響を引き起こした。国語の学習をつうじて、社会における他者との関わりのなかで求められるコミュニケーション力や思考力を伸ばすこと、そのために言語感覚を磨き、言語による表現力を培うことで主体的な思考を涵養するという目標は首肯できる。他方で、この新指導要領で提案されている科目の再編と細分化が、その目標を達成するためにほんとうに有効なのかという点については、疑問が残る。また、「文学国語」と「論理国語」の分離は、思考力と表現力を全体的に涵養するという国語科の主導理念に反するのではないか、という疑念も各方面から出された。日本学術会議言語・文学委員会古典文化と言語分科会が、2019年8月1日に開催したシンポジウム「国語教育の将来——新学習指導要領を問う」の際に回収したアンケート用紙にも、現職の高校教員から同じような見解が表明されている。

他の教科と較べた場合、新指導要領における「国語」の特徴は、必修科目として「現代の国語」と「言語文化」、選択科目として「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探究」という多くの科目が設置されることである。すでに本文で詳述したように、この科目設定に問題があることを指摘し、それに対して改善案を提示することが本提言の趣旨であった。ただし短期的には、これらの科目の教科書について多様性を尊重し、境界領域の柔軟性に配慮した教材選定・編集が望まれるし、文部科学省の教科書検定に対しては柔軟かつ弾力的な対応を要望したい。

「知識詰め込み型」から「思考力育成型」への移行は、日本の教育界における趨勢であり、その点で国語教育は大きな役割を果たさなければならない。ただし、思考力の育成や論理的構築力の涵養を、文学の学習とは異なる、あるいはそれと対立する営みとして捉えることは不毛であろう。新指導要領では、教材として「論理的な文章」「実用的な文章」「文学的な文章」の三つに大別することが前提になっているが、すぐれた教材ほど多分野にまたがり、このような単純な区分けを超えて生徒の思考力を鍛えてくれるのである。安易な比較はできないが、諸外国の高校における国語教育の現状を概観するかぎり（＜参考資料6＞～＜参考資料12＞を参照のこと）、国語教育の根幹は自国の文学作品を読み解き、解釈し、それを注釈することで思考力と感受性と表現力を涵養することにある、と言ってよい。わが国においても、国語における「文学」の概念をもっと広く定義する必要があるだろうし、それによって将来的には、「論理」と「文学」を総合化するような教材と科目が構想されることが望ましい。

高校国語における古典教育は、現代文の教育以上にさまざまな問題を抱えている。受験に必要という理由から、古典作品の学習にあたっては品詞分解と現代語訳がとりわけ重視されるという状況があり、それが生徒たちの古典離れを引き起こしていると指摘されてきた。古典といっても平安時代から江戸時代まで範囲は広いが、高校における古典教育をより魅力的なものにするために次のような対策が有効であろう。文字資料だけでなく、パソコンを活用してデータベース、視聴覚教材を積極的に取り入れて、生徒たちの日本の古典への関心を高める。多くの作品に触れることで、生徒たちが古典世界との差異と類似を感

じとり、みずからの世界観を拡大できるようにする。能、狂言、歌舞伎など古典芸能を実際に鑑賞することで（映像や動画も活用する）、その楽しさを実感してもらおう。もちろん、こうした古典教育のさらなる充実を図るためには、それに適した新たな教材を開発し、それを教育現場で活用できる教員を着実に養成することが求められる。

思考力、感受性、表現力を涵養することがあらゆる教育に求められていることは疑問の余地がない。それは最終的に、情理を兼ね具えた市民を形成することにつながるはずである。「情」のない「理」は危うく、「理」のない「情」は説得力を欠く。国語は両者を包摂した科目として機能することが今後ますます求められるに違いない。

## <参考資料 1> 審議経過

平成 30 年

- 1 月 21 日 古典文化と言語分科会（第 1 回）
  - ・ 役員を選出、第 24 期の活動方針について
  
- 3 月 31 日 古典文化と言語分科会（第 2 回）
  - ・ 小・中学校における古典教育の現状に関する委員による研究発表
  - ・ 日本の古典教育についての議論
  
- 7 月 30 日 古典文化と言語分科会（第 3 回）
  - ・ 江戸時代の往来物に見る古典教材についての発表と議論
  - ・ 高校国語教科書（現代文）の現状と課題についての発表と議論

平成 31 年

- 3 月 28 日 古典文化と言語分科会（第 4 回）
  - ・ 文部科学省が告示した新学習指導要領と国語教育の問題について検討。

令和元年

- 8 月 1 日 古典文化と言語分科会（第 5 回）
  - ・ 高校における国語教育の現状と展望に関する参考意見を、2 名の関係者から聴取した（文部科学省初等中等教育局視学官、前灘中学校高等学校教頭）
  
- 8 月 1 日 分科会主催によるシンポジウム「国語教育の将来——新学習指導要領を問う」を開催
  
- 12 月 22 日 古典文化と言語分科会（第 6 回）
  - ・ 提言案の構成と内容について協議

令和 2 年

- 5 月 14 日 日本学術会議幹事会（第 290 回）
  - 提言「高校国語教育の改善に向けて」について承認

## ＜参考資料 2＞シンポジウム報告

- 1 名称 「国語教育の将来——新学習指導要領を問う」
- 2 日本学術会議の主催者： 言語・文学委員会 古典文化と言語分科会
- 3 共催：日本学術会議 言語・文学委員会
- 4 開催日時：令和元年8月1日（木）13：00～18：00
- 5 開催場所：日本学術会議講堂
- 6 開催趣旨：平成30（2018）年3月、中教審の高大接続システムの提唱に基づき、高等学校国語科の新学習指導要領が告示された。この指導要領は、今後の高校における国語教育の根幹と、大学入試のあり方にかかわるものであり、影響がきわめて大きい。本シンポジウムでは、学習指導要領の作成にたずさわった文部科学省の担当者、高校教育の関係者、大学において教員養成学部に勤務する者、大学の文学研究者などさまざまな立場のひとが集まって、この問題に関する発表と全体討議、そして質疑応答を行なった。
- 7 参加人数： 講演者等：9名                      その他の参加者：240名
- 8 特記事項

シンポジウムには大学の文学研究者、高校教員、大学生、高校生、教科書関連会社、出版社など多方面から、合わせて250名近い参加者があり、シンポジウムのテーマに関する強い関心が示された。

メディア関連では、東京新聞が本シンポジウムの案内を掲載し（2019年7月12日）、当日はいくつかの新聞社の記者が来場した。その後、中日新聞（2019年8月25日）が教育欄において、「文学を軽視、懸念の声」と題する記事を掲載し、シンポジウムの内容と討論を踏まえながら、高校国語の新学習指導要領の課題を指摘した。朝日新聞（2019年9月15日）は本シンポジウムの様子を伝える写真とともに、国語教育の将来に関する文学研究者の懸念を伝えている。

また本シンポジウムとほぼ時を同じくして、古典文化と言語分科会のメンバーが所属する日本文学関連の諸学会が、新学習指導要領に対する見解を公式に発表した。

シンポジウム当日、103名の参加者からアンケート回答、33名の参加者から質問用紙が提出された。古典文化と言語分科会が今後作成する提言書に、そこで表明された意見を適切に反映させることをめざす。

### ＜参考資料 3＞大学入学時点での学生の古典意識

2005 年度の国立国語政策研究所の実態調査と軌を一にして、横浜国立大学では、大学に入学したての学生達を対象に、「古典力」アンケートを実施した。「古典力」とは、日本の伝統的言語文化の事項全般を継承・発展させ、更には国際人として将来必要となるような日本人の基本的教養という意味において、日本の歴史や文化、古い時代の生活習慣の全般にわたる、古典に対する知識・能力という意味で使用している。古文・漢文の知識や読解力、好き嫌い、受けてきた古典教育の実態に関するアンケートである。2007～2018 年度の 12 年間、横浜国立大学教育学部（2016 年度以前は教育人間科学部）学校教育課程（計画的教員養成課程）1 年次生（各年度約 230 名）に行った。実際のアンケート結果とその分析・考察は「大学生の古典力調査報告 I～X」（『横浜国大言語教育研究』30・32・34・38・40～44 号 2009～2019 年）に掲載しているので、詳細はそちらを参照されたい。2018 年度に関しては未公開のデータを使用している。

受験勉強を終了して 1 年以内の時期（半数は 4 月当初、残りの半数は 10 月初旬である）、どのくらい古典教材が読解できるか、知識がどのくらい身についているかの調査と、それまで受けてきた教育に対して、どのような印象を持っているのかについて聞く部分から成り立っている。

その中で、特に注目したいのが、次の表 1 と図 1 の結果である。

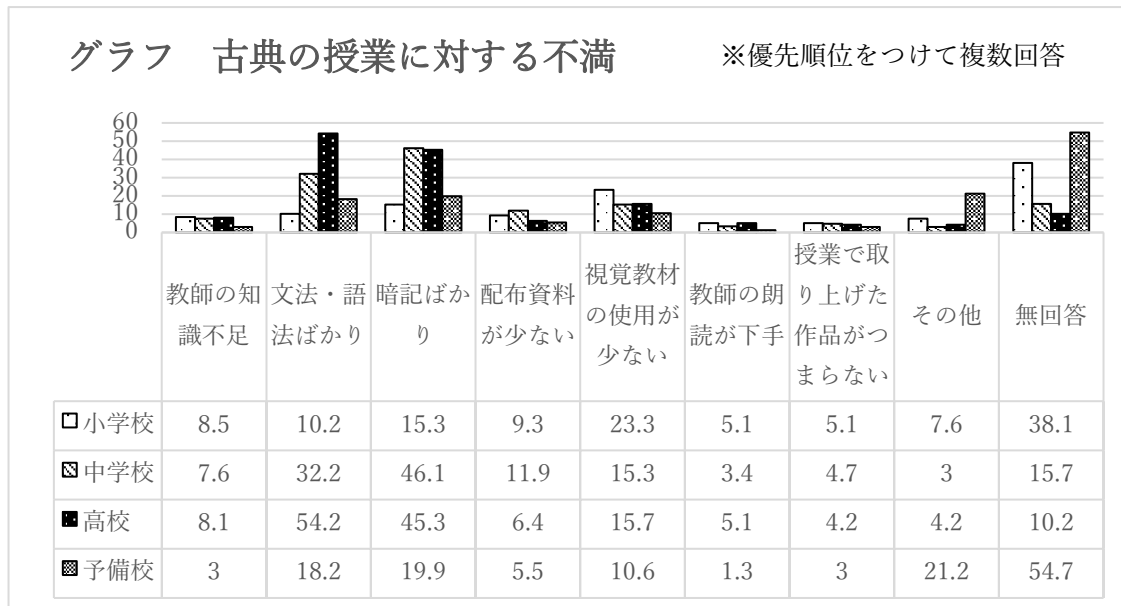
#### 2014～2018 年度古典力調査結果

横浜国立大学教育学部学校教育課程 1 年次生対象（各年度約 230 名）

表 1 将来古典を教える場合に不安な点

	2014	2015	2016	2017	2018	平均
作品をあまり読んでいない	61.6%	56.9%	58.6%	37.4%	57.2%	54.3%
文法がよく分からない	40.5	32.6	36.8	24.2	33.1	33.4
そもそも古典が好きではない	30.4	33.5	32.7	29.7	31.4	31.5
世界観がよく分からない	20.7	11.0	19.1	3.2	8.5	12.5
古文の朗読が苦手	7.6	6.9	6.4	0.9	8.1	6.0
その他	2.1	3.7	2.3	4.6	5.9	3.7

（出典）窪田祐樹・安野葵・富永八千代・辻拓真『横浜国大言語教育研究』41～44 号、2018 年度分は未公開データ、より分科会で作成



(図1) 古典の授業に対する不満 (2018年度)

(出典) 横浜国立大学未公開データより、辻拓真氏がグラフ作成

表1は、「将来古典を教える場合の不安な点」に関する項目を複数回答可で選択させた回答の過去五年間の結果である。好き嫌い以前に、「古典をあまり読んでいない」ことへの不安を持つ学生が、六割前後常に存在していることに、注目しなければなるまい。科目構成が変わった2003年度以降、高校で教える古典作品の数が大幅に減少したことが影響しているに違いない。また教員志望の学生達がそのような不安を持っているということは、現場の教師たち、特に若手教員の場合も学生と同様の不安を持って勤務していると推測されることである。少なくとも13年間に亘る調査の結果がほとんど変わっていない点からすると、最初のころに教師になった人たちは今中堅クラスで活躍し始めている世代であり、その人たちが古典作品をあまり読んでいないという不安を抱いて、現場に出て行ったのである。

図1は、古典の授業に対する不満な点についてのアンケート結果である。質問は、「各時代(小学校、中学校、高校、学習塾・予備校)に受けた古典の授業で悪かったものについて、以下の項目から当てはまるものを選んで、要因として大きいと思う順番に優先順位をつけて数字で答えて下さい(⑦を選択した場合は作品名も答えて下さい)」というものであった。

- ①教師の知識不足(質問しても答えられない) ②文法、語法ばかり  
 ③暗記ばかり ④配布資料が少ない ⑤視覚教材の使用が少ない  
 ⑥教師の朗読が下手 ⑦授業で取り上げた作品がつまらない ⑧その他

どの年もほぼ同様の傾向と数字なので、直近の2018年度の分を掲載している。高校における不満の第1位は「文法ばかり」であり、第2位が「丸暗記」である。図では表示し

ていないが、不満第2位までの数を加えると、「文法ばかり」は八割以上、「丸暗記」は六割以上の学生が選んでいる。

機械的品詞分解・丸暗記的現代語訳による受動的学習により、古典を学ぶ意義が見つけられず、古典嫌いとなっている生徒・学生が多いという現実が、数字に顕著に現れているといえよう。

この古典嫌いの原因は生徒自身にあるのだろうか、それとも教師側にあるのだろうか。古典を知らない、古典に関心のない学生たちが、大学入学以前に大量生産されている。そして重要なことは、小中高の教師の多くが、すでに古典嫌い・苦手意識を持っているということであろう。そのために受験に必要ということを経由とした品詞分解と固定的な現代語訳の押し付け的授業が、十年一日のごとく、いやもっと長期に亘り、しかも年々助長されて繰り返されている。

たとえば西尾実が、訓詁注釈に逃げ込む国語教育のあり方への抵抗の動きを指摘したのは1937年である（『国語教育全集2』1937年）。第二次世界大戦以前ですでに、教師から一方的に知識伝達を行う授業形態に対して警鐘を鳴らす動きがあった点が注目される。また板東智子は、1960年度より「現代国語」と「古典」が分かれる時点での現場の状況に関して、その時の指導要領作成者の一人であり、教員経験もある増淵恒吉談として、「古典の授業は「技術的な解釈の方法」を教えればよいという授業観に問題がある」と紹介している（「古典は義務教育に必要か」『山口国語教育研究』24巻、2014年）。

訓詁注釈は古典摂取の基本的な方法として古来行われてきたことではあるが、近代以降の学校教育においては、それだけではいけないという認識が早くから存在しているのである。しかし現場ではそこに「逃げ込む」傾向があり、国語教育に関する指導要領の大改訂の度に、訓詁注釈のみの教育から脱する方法が模索されていたのである。しかし結局そこから脱することができず、現代に至っている。

古典嫌いの大量生産の根底にあるのは、押し付け的な訓詁注釈で終わっている古典教育の中で、古典世界の人は宇宙人と同じで、現代人、つまり自分とは無関係であるという意識であろう。例えば『宇治拾遺物語』「鬼に瘤取らるること」において、「ただ目鼻をば召すとも、この瘤は許し給ひ候はん」と言った爺の真意は何かとの問いかけに対して、本心だと考える大学生が年々増加してきている（古典力アンケートと同じ学生たちへの授業の中で）。自分だったら目鼻は大切なのは当然だが、古典の中の人なら、そうなのかもしれないと思うのである。

「高校の授業では、現代語訳と品詞分解しかやっていなかった」と答える学生が多い。本当は合間に面白い話などを聞かせて工夫している教師もいるに違いないが、よほど仕掛けをして大胆に個性的な授業でもしなければ、あるいはよほど古典好きの生徒でもなければ、一般的には少く面白そうな話を授業の合間にしたくらいでは、印象に残らないのであろう。受験体制に組み込まれた教師と生徒の間では、受験に必要だという口実によって、安直でつまらない受動的な文法と現代語訳に逃げ込んでしまい、その結果古典の授業は瀕死の状態におかれ、生徒たちにとっては、受験に縛られた否応もなく取り組まされる、詰まらない無意味な暗記の科目でしかないのである。

日本全体の大学1年生の実態を調査しているわけではないが、教員養成に関しては首都圏の主要な大学に位置付けられる横浜国立大学において、計画的教員養成系課程に入学した学生の、1年生の段階でのアンケートである。神奈川出身の学生が約半数、残りは全国から集まってきている。日本有数の進学校で受験指導を効率的に施されてきた学生はほぼ皆無である。文系国立大学に合格できる能力を有しているということでは、平均よりは少し高い能力の学生達ではあろう。教師の指導は無視して、どんどん自分の興味のままに勉強するような、型破りな個性派はほとんどいない。教師の指導の下、真面目に勉学に取り組む優等生タイプが多い。平均よりは高いかもしれないが、「一般的」と言っているような教育を受け、教師の施した教育効果が素直に表れているというタイプが多い。ということで古典教育の実態を知るための指針とはなるであろう。また将来どのような教師が誕生するのかも、ある程度予測可能である。古典をあまりしらない、文法と現代語訳を暗記したという記憶しかない、古典は苦手であるという教師である。

生徒たちが興味を持たない授業をしている教師に大いに問題があるといえるのだが、受験体制のなかで、カリキュラムと授業数、単元の枠に縛られ、同僚と足並みをそろえて授業をしなければならない教師たちだけに、その責任を押し付けるわけにはいかない。

指導要領の改訂が行われ、教科書が新しくなる今、教科書がどうかわるのか、それをどのように効果的に教えていけばいいのか、現場の教師だけに任せておくのではなく、文学研究者や教育学者も含めた様々な観点から検討を行い、この機会に、瀕死状態の古典教育に新しい風を吹き込み、楽しく身につく授業へと転換を図るべきであろう。



#### <参考資料4>現状の小中高教科書で繰り返し登場する作品例『枕草子』の場合

- 小学校 現行教科書5種中4種で掲載（掲載のない1社は古典を完全に軽視）  
中学校 現行教科書5種全部で掲載  
高校古典B 現行教科書20種中10種で掲載

この連続性をどう教育の中で活用していくか、現状では、前段階で習っている場合、取り上げないで済ませる教師が多い。小中高教員、教員養成の大学において、もっと検討して、活用する必要がある。

#### 『枕草子』初段掲載教科書

- 小学校** 5年 光村図書・東京書籍・学校図書 6年 教育出版  
（「うつくしきもの」6年 三省堂 初段は非掲載）  
**中学校** 2年 光村図書・東京書籍・三省堂・教育出版  
3年 学校図書  
**高等学校古典B** 20種  
掲載教科書 第一学習社3種・数研出版1種・筑摩書房1種  
・明治書院2種・桐原書店1種・三省堂1種  
・教育出版1種  
非掲載教科書 東京書籍3種・三省堂1種・大修館3種・教育出版2種・文英堂1種

#### <参考資料5>現行高校古典教科書における、古典芸能掲載状況

古典A・Bで以前は古文の教科書に能「井筒」の本文が掲載されていたりもしたが、近年古典芸能は全く姿を消してしまった。現行教科書では古典Aには皆無、古典B全20種類の中で、唯一例外的に東京書籍「新編古典B」（占有率第9位、8.1%）で、「古典芸能への誘い」というタイトルで、能・狂言・人形浄瑠璃・歌舞伎・講談・落語」の項目ごとに、カラー舞台写真を多数掲載しつつ、簡単な解説を施している。文学史的な扱いといえようか。もう一種三省堂「古典B」（占有率6位、4%）には口絵写真が一枚、「歌舞伎・人形浄瑠璃・能・狂言」の舞台写真が各一枚掲載され、その場面の詞章が掲載されている。つまり、高校では古典芸能は文学史的に特色を抑える場合もあるが、詞章にまで踏み込んだ作品分析などは全く採用されていないということがわかる。

## ＜参考資料 6＞中国における古典教育の現状

中国の小学校では、すでに1年次の教材として李白「静夜思」、白居易「池上」、楊万里「小池」が取り上げられており、2年次以降6年次まで多くの古典教材が教科書に取り上げられているが、圧倒的に詩（韻文）作品が多い。内訳は、詩は63編、詞は3編、散文は15編、現代中国語訳された散文が8編である。日本の教科書にもよく採用されている李白・杜甫・王維・杜牧らの詩作品は多く取り上げられている。詩作品は音読して覚えることが前提とされているようで、いわゆる暗唱するための教材として多くが用いられている。中国の一部の幼稚園では『論語』を斉唱して覚えさせることを教育に取り入れている所もある。かつて日本でも素読を中心とした教育が行われていたが、これと相通ずるものであろう。

中学校では、やはり漢詩作品が多く教科書に取り上げられている。内訳を示せば、詩は62編、詞は16編、散文は32編、元曲は4編、現代中国語訳された散文が4編である。多くの教材は、日本における漢文教材と共通するものが見られる。李白や杜甫の詩の他、陶淵明の「桃花源記」、列子の「愚公移山」なども教材として取り上げられている。

高等学校の教材としては、必修教材として漢詩15編、詞9編、散文15編、元曲1編、現代中国語訳された散文2編が教科書に収められている。必修教材の他に、選択教材として『中国古代詩歌散文鑑賞』があるが、そこでは漢詩43編、小説（三国演義、水滸伝、西遊記、紅樓夢など）9編、思想家の文章26編、散文32編などが取り上げられている。また、選択教材として『先秦諸子選読』<sup>8</sup>が準備されており、そこでは『論語』『孟子』『荀子』『老子』『莊子』『墨子』『韓非子』の文章が取り上げられている。教科書編集の目的として、「先秦諸子の論著の学習を通して、学生が心身を陶冶し、徳行を身に付け、自国の伝統文化、思想に対する認識を高め、自国の文化を敬愛し、古典を読解する基本的能力を身に付けさせること」が挙げられている。

中華人民共和国教育部（日本の文部科学省）の発行した2017年版『普通高中語文課程標準』（人民教育出版社）では、教材の性格を「義務教育を基礎として、学生の国語能力を更に高め、道徳思想と人文科学の教養を身に付けさせ、生涯学習と個性の伸張の基礎を作り、中華文化の伝承発展と、民族意識と想像力の増強をはかるもの」と定義している。

また古典教育については、「古典の読解を通して、古典語彙の意味と用法を把握し、言語の発展過程を理解し、現代語の意味で古典を理解することを避け、中国の優秀な伝統文化作品を正確に理解するようにさせる」、「授業で扱う講読教材の内、二分の一は古典教材とする」と述べられている。

2017年、中国共産党第19次全国代表大会で習近平国家主席は「文化に対する自信を確かなものとし、社会主義文化の繁栄と隆盛を推進する<sup>9</sup>」と述べ、また2019年9月9日に

<sup>8</sup> 普通高中課程標準実験教科書『語文』先秦諸子選読（人民教育出版社編）

<sup>9</sup> [http://www.gov.cn/zhuanti/2017-10/18/content\\_5232653.htm](http://www.gov.cn/zhuanti/2017-10/18/content_5232653.htm)

北京師範大学の教員に向かって「古代の経典にみえる詩詞や散文を教科書から除くことには甚だ賛成できない。こうした古典を学生の脳裏に植え付けることが大切である」とも言った。こうした発言を受け、中国では古典教育を重視し、教科書の教材にも多くの古典が採用されるようになった。従来、中国教育出版社で全国的に統一されていた教科書は、現在、その他の多くの出版社でも編集されており、間もなく幾つかの新しい教科書が発行されると聞く。日本においても、再度、古典教育の重要性について議論すべきではなかろうか。

## ＜参考資料7＞台湾における古典教育の現状

台湾における古典教育は、台湾の政治的状況とおおいに関わりがある。中国から距離を置こうとする現政権にとっては、台湾独自の文化、文学を強調する必要がある。そのために台湾原住民の言語・文化にも目配りを怠らず、日本統治時代の文学作品（台湾文学）が教科書に採られることもある。中国の伝統文化と台湾独自の文化とのせめぎ合いのなかで揺れているというのが現状であろう。

とはいえ、中国語（北京語をもととする国語）を主要な言語としている限り、伝統的古典のもつ重みに変わりはない。なぜならば正しい中国語を書くために古典は必須だからだ。話し言葉と書き言葉の隔たりは、当今の日本語に比べてずっと大きいように見える。公的な文書のみならず、メールなどの日常的な文章においても、古典に基づいた語彙・言い回しが生きた言語として用いられ、典雅な文章が求められる。中国語のリテラシーのために古典は「必需品」なのだ。

国語の教科書のなかには、小学校から人口に膾炙した漢詩が取り込まれ、中学では1年生では『論語』の一部、清・沈復の抒情的自伝『浮世六記』など基本的古典・親しみやすい古典が加わる。2年、3年になると、「古詩十九首」、韓愈「師説」、范仲淹「岳陽楼記」など、教材が広がる。中学の古典教育には古文の読解力も要求され、試験には教科書にない古文が出題されることもある。

高等学校は、進学を目的とする高校、就職を前提とする高校、また日本の高専にあたる五年制の学校などに分化するため、古典教育も学校によって異なるが、大学に進学する生徒が学ぶ高校の場合、「中国文化基礎教材」という副読本によって、古典教育が強化されている。それには『論語』『孟子』などのほか古典詩も増えて、教科書の不足を補っている。大学受験のための統一試験にはもちろん古典も出題される。

古典教育に選ばれた題材は、量の多寡を別とすれば、日本の江戸時代以降によく学ばれてきたものと、基本的に大きな違いはない。それらが伝統的漢学の基礎であるためであろう。ただ暗唱を重視することが中国でも台湾でも際立っている。古典の学習には、暗唱が何よりも基本になるからである。

小学校では父母がボランティアとして古典を担当する課外授業が設けられているという。そこでは内容の理解はにおいて、古典の語句を暗唱する。日本でかつて行われていた素読に近いものといえる。そうした活動が自主的に行われていることも、古典の伝統を尊重する文化が持続しているあらわれであろう。

加えて古典教育は中国においても台湾においても独特の意味を持つ。それは国際社会のなかでアイデンティティを確保するために、「悠久なる歴史」を自負して国際的な地位を高めるために、古典が欠くべからざる意義を有することだ。「文」の国の伝統はいまだに衰えていないと言わねばならない。

## ＜参考資料 8＞イギリスにおける高校段階での国語教育

### (1) 全国共通カリキュラム (National Curriculum)

イギリスの教育課程基準である「全国共通カリキュラム」(National Curriculum)は、初等教育と中等教育のために作成された指導要領で、Key Stage (以下 KS) 1 から KS 4 (5-16歳) を対象としている<sup>10</sup>。教育現場では、担当教員が「全国共通カリキュラム」に基づき学習項目を決定し、授業プランを立てる。多くの中等教育機関では、実際には、前期中等教育証書に相当する全国統一試験 (General Certificate of Secondary Education: GCSE、以下 GCSE) や大学入学資格として認められている、一般教育修了上級レベル (General Certificate of Education Advanced Level: GCE A level、以下 A level) 等を目標に、各試験委員会が公表しているシラバスに沿って、年間授業計画を立てるが、試験委員会の作成するシラバスの基礎となるのも「全国共通カリキュラム」である。

日本の高校就学年齢にあたる 15-16 歳は、イギリスでの KS 4 (14-16 歳) とほぼ一致する。KS 4 では GCSE を 10 科目程度受験し、GCSE のシラバスに従って年間プログラムが組まれる。国語では、英文学の伝統を正しく理解するための読解力が問われ、文学作品に関する解説文、書評等も広く読む必要がある。具体的にはシェイクスピアの戯曲を少なくとも 1 作品、19 世紀から 21 世紀の著作、1789 年以降の代表的ロマン派詩人を含む英詩を学習しなければならない。また文学作品を学習する際、抜粋ではなく著作全体を読むよう指導される。

16-18 歳の Key Stage 5 (KS 5) では、一般教育修了上級レベルの前半に受験する AS level (Advanced Subsidiary level) と後半の A level に対応したプログラムが立てられる。A level の国語では、詩、散文、戯曲から、最低限 8 作品に取り組む必要があり、具体的には 1900 年以前に刊行された作品を少なくとも 3 作 (そのうちシェイクスピアの戯曲は 1 作以上)、また、2000 年以降に刊行・上演された作品を少なくとも 1 作品学習する。また、これらの中に英文学の発展に重要な影響を与えた翻訳作品を含めることも認められている。

### (2) KS 4、KS 5 の国語教育の現状

イギリスの国語教育では、我が国で使用されている形式の「教科書」を使う学校が減少し、教科担当教師が「全国共通カリキュラム」に基づき、1 年間の教育プログラムを作成する傾向にある。学習予定のテキストは担当教師が独自に収集するが、ウェブサイト上の教育教材をダウンロードする場合も多い。

KS 4 では、GCSE の受験準備を念頭に教材が選択される。同プログラムは語学と文学を分離し、語学を必修科目、文学を選択科目とするため、実態としては、人文系学科主任の責任において、文学の授業を提供するか否かが決定される。その結果、例えば、シェイク

---

<sup>10</sup> 本稿ではイングランド用を参照する。

<https://www.gov.uk/government/publications/national-curriculum-in-england-english-programmes-of-study/national-curriculum-in-england-english-programmes-of-study> (最終確認日 2020 年 1 月 15 日)。

スピーア作品等の初期近代英語を不得意とする生徒の多い学校では文学を選択しない場合がある。GCSE の段階で文学を選択しなければ、A level で文学を選ぶ生徒はさらに減り、大学での文学専攻学生の減少につながっている。

また、教材に占める初期近代英語以前の文学作品に関して述べると、中英語で書かれたチョーサーの『カンタベリー物語』（14世紀）はA level のシラバスに含まれるものの、これを教材に使うか否かは担当教師の判断に委ねられる。多くの場合、文法や歴史・文化的コンテキストの理解に時間を有する中英語のテキストは敬遠される。

### (3) まとめ

現在、英国の中等教育において、文系科目より STEM 科目と呼ばれる理工系科目を重視する傾向が続いている。しかし、近年の教育改革において改善された点は、伝統的な英文学テキストの学習において、これまで広範に使われていた抜粋テキストを避けて作品全体の学習を指導するようになったことである。このような学習はすでに 11-14 歳の KS 3 においても行われ、KS 4、KS 5 へと継続される。この取り組みは英文学の伝統を守るための読解力の維持・向上に不可欠な学習方法として教育現場においても支持を得ている。

## <参考資料9> イギリスにおける高校段階での古典教育

### (1) GCSE における古典科目選択

KS 4 終了時 (16 歳) に受験する GCSE では、古典科目を選択受験できる。このような選択が可能なのは、古典教育 (ラテン語・ギリシア語テキストを中心に古典古代の政治・社会・歴史・思想・文化等の理解を深める教育) を 16 歳までに受けている生徒がいるからである。「全国共通カリキュラム」に拘束されない私立学校では、初等教育段階でラテン語学習が始まる。古典教育は 1980 年代に軽視・縮小されたが、近年はその重要性が再認識され、低年齢で学習を開始する傾向が顕著になった。実際、「全国共通カリキュラム」改革によって、2014 年 9 月以降は私立学校だけではなく公立学校においても、初等教育段階の KS 2 (7-11 歳) で古典語学習を開始できるようになった<sup>11</sup>。

ちなみに「全国共通カリキュラム」改革以前の GCSE の古典科目受験状況を 2012 年で見ると<sup>12</sup>、受験者数は「ラテン語」8,975 名、「古代ギリシア語」1,283 名、「古典文明」4,443 名、「古代史」350 名だった。2014 年改革により古典受験者は今後、増加すると予測される。

### (2) AS level と A level

KS 5 での教育は AS level と A level の試験準備にあてられ、日本の高2段階で AS level を、高3段階で A level を受験する。イギリスの高校段階の教育は大学での専門教育の準備段階として明確に位置づけられ、KS 5 での教育は受験科目の学習に特化している。

これらは日本の大学入試センター試験のような単一の独立行政法人による試験ではなく、各大学による個別試験でもない。試験は awarding bodies と呼ばれる非営利法人団体によって運営される。イングランド・ウェールズ・北アイルランドに7つある運営団体はいずれも、教育雇用省のガイドラインに沿ってシラバスの開発、試験問題の作成・実施・採点・評価の統括を行い、必要な情報を公表している。

選択可能な科目は A level で 80 以上ある。古典関係だけでも「ラテン語」「ラテン語散文」「ラテン語韻文」「ギリシア語」「ギリシア語散文」「ギリシア語韻文」「考古学と古典世界」「ローマの社会と思想」等、多様である。マークシート方式ではなく記述式の筆記試験であるため、採点ガイドラインがこと細かく定められている。記述式は採点の公平性担保が困難とされるが、イギリスでは試験のサンプルや採点基準、実際の採点例などがオンラインで公表されている。試験機関が出版社とタイアップして刊行する多様な教科書・参考書も充実し、生徒が古典語と古典作品を多角的に深く学べるようになっている。

---

<sup>11</sup> Arlene Holmes-Henderson, Steven Hunt, and Mai Musié, eds., *Forward with Classics: Classical Languages in Schools and Communities*, p. 1.

<sup>12</sup> <https://startingtoteachlatindotorg.files.wordpress.com/2018/06/hunt-s-2013-50-years-of-classical-civiization.pdf> (最終確認日 2020 年 1 月 15 日)

### (3) 研究者による古典教育の支援

イギリスの古典教育の特徴は、研究者集団による組織的な支援活動である。小中高の古典教諭のなかには、必ずしも古典専攻ではなかった者やもっと学びたい者がいる。イギリスではそんな教諭たちを援助する組織が、大学の古典学部教員によって運営されている。小中高の現場教師への全国規模での支援活動とは、支援サイトの運営・資金収集・シンポジウムや学習会の開催等である。人格の陶冶と大局的視点の涵養に資する古典教育は、21世紀に入ってからその真価と重要性が再認識されるようになった。古典を未来につなごうという思いを実践に移すイギリスの研究者たちは、研究者としての業績の蓄積や個人的成功よりも、格差是正や自由・平等の達成という社会正義を優先させており、古典は万人の宝であり、社会理想の実現には古典が必要だという信念をもっている。20世紀の古典研究を牽引したイギリスの底力は今なお脈々と受け継がれ、人類の貴重な遺産としての古典の叡智を次世代に伝えるために、研究者たちは古典教育を支援する活動のために結束しているのである。



## <参考資料 10> チェコ、スロバキア、イタリア、アメリカの高校でのギリシア語ラテン語教育

収集した資料は、(1)チェコおよびスロバキアの主に Gymnasium でのギリシア語ラテン語教育、(2)イタリア Liceo Classico でのギリシア語ラテン語教育、(3) Latin School の教育、の3つで、(1)は京都大学文学研究科西洋古典学専修のマルティン・チエシュコ准教授、(2)は同専修博士後期課程在学中でイタリア留学経験のある福島正幸氏から、それぞれ提供を受けたものであり、(3)は注記に示すとおりである。いずれも古典語教育に注力する教育機関であることは留意しておく必要がある。

これらの資料から見て取れると思われることをまとめると、以下のとおりである。

- ・チェコおよびスロバキアの場合、大きな特色は政治体制の変化が教育内容に影響したことである。オーストリア＝ハンガリー支配下の16世紀に Gymnasium が創設されて以来、古典語教育が重視されたが、二度の世界大戦を経て、社会主義体制下になると、ロシア語が古典語に取って代わり、ラテン語は選択科目、ギリシア語も一部で選択科目となった。ソ連崩壊後に伝統的な Gymnasium が復活し、人文学を主とするところではヨーロッパ諸語とともにラテンが教授されている。

- ・Gymnasium、Liceo Classico、Latin School のいずれでも、教授方法について、とくに初学者段階で基本的な違いはない。

- ・授業の進め方として、古典語学習に際しては文法を細かく正確に把握することが必須であり、それが実践されている、原典テキストを読む際、現代語訳が参照されている、学生の自主発表、劇の上演などによる学習の動機づけの工夫が試みられている、といったことが認められる。

- ・欧米でギリシア語ラテン語教育に長い伝統をもつ Latin School<sup>13</sup>ではその学習に実用的価値が認められている。言い換えれば、古典語教育が社会に有用な人材の輩出に必要と考えられている。それは、公的文書にラテン語が用いられた時代には当然のことだが、現代でもアメリカの Latin School がエリート養成のために Declamation を重視していることによく表れている。これは仮想的状況下で取るべき行動の勧奨や是非の議論、あるいは仮想的訴訟事案をめぐって原告側と被告側双方の主張を創案して、政策論議や法廷弁論の練習とするもので、古代ローマに起源をもつ。古代には、出発点になる仮想的状況は古典作品から取られている。

- ・ギリシア語ラテン語教育の重みが薄れる傾向が欧米全般にある一方、ニューヨークでは2006年に Brooklyn Latin School<sup>14</sup>が開校している。

<sup>13</sup> ヨーロッパでは、中世にあらゆる学問の基礎である（学術の全域、司法行政のほとんどに用いられる）ラテン語教育を目的に grammar school が14世紀に創始され、ルネサンスを経ると、古典への回帰から、人文学全般（文学、歴史、修辞学、弁証法、自然学、算術、ギリシア語など）の教授が行われ、19世紀まで存続した。source:

[https://en.wikipedia.org/wiki/Latin\\_school](https://en.wikipedia.org/wiki/Latin_school)。

<sup>14</sup> 人文学と古典学に教育の主眼を置く Latin School で、モデルは Boston Latin School (1635年創立。エリート養成を目指す public school。古典の教養を教育の柱とする。古典のスタッフは15名ほど(Englishが24名)。source: <https://www.bls.org/>, [https://en.wikipedia.org/wiki/Boston\\_Latin\\_School](https://en.wikipedia.org/wiki/Boston_Latin_School)。

## <参考資料 11>ドイツの「ドイツ語」・「ラテン語」教育について

### (1) はじめに

ドイツでは教育は連邦を構成する 16 の州政府の専権事項であり、州ごとに教育制度や教育方針が定められ、高校卒業／大学進学資格試験 Abitur も州単位で行われる。さらに同種の学校間でも各校毎に異なった教育方針を定めることが認められており（シュタイナー学校なども公認校である）、カリキュラムは州、学校の種類、各学校によって多様である。

日本の高等学校 3 年間にあたるのは、4 年間の基礎学校終了後、大学進学コースであるギムナジウム（8 年制、9 年制）に進学した場合の第 10 学年から第 12/13 学年である。第 10 学年（日本の高校 1 年にあたる）修了に合格すると、中等教育修了資格及び、ギムナジウム上級学年進学資格を取得して上級学年への進学が認められる。また第 10 学年を、ギムナジウム以外の学校からの編入者が上級進学に備えるための導入学年とするギムナジウムもある。職業高校も 13 学年までである。

### (2) 「ドイツ語 Deutsch」教育について

#### ① 「ドイツ語」教育の意義と方針

ここではバイエルン州を例に、日本の高校に相当する学年のドイツ語教育、とくに文学との関わりについて紹介する。それにあたっては以下の HP を参考にした。

1. バイエルン州教育文化省 (Bayerisches Staatsministerium für Unterricht und Kultus) <https://www.km.bayern.de/>
2. 学校の質と教育研究のための州立ミュンヘン研究所 (Staatsinstitut für Schulqualität und Bildungsforschung München) <http://www.isb.bayern.de/startseite/>

#### ② 「ドイツ語」科目の意義

科目としての「ドイツ語」は、人間性形成にとって非常に重要であり、言語を自由に使いこなすことは、自律・世界の解明／開拓・寛容・その時代の文化・社会・政治的出来事への参加を可能にする。ドイツ語は思考のメディアかつ対象であり、批評能力と自己省察の手ほどきをし、想像力を拡充し、問題提起しまた創造的に解決する力を育成する。さらに知覚と表現の能力を訓練し、美的教育の一端を担う。体験能力と創造性を強化することで、適切な振る舞いの手ほどきをする。そのために、以下の 4 領域の能力を養い、方法論と言語活動の技術の獲得が目指される。1. 話し、聴く。2. 読む-テキストやその他のメディアを扱う。3. 書く。4. 言語の用法と言語を検討し省察する。

#### ③ 文学テキストを扱う意義

文学テキストが内包するさまざまな挑戦は、自己発見の助けとなり他者の立場や視点に対する理解を促進し、人間の経験の基本モデルを伝える。中世から現代に至るまでの文学史上の時代や潮流と取り組むことは、思春期の生徒たちに、テキストの歴史的次元を体験する能力を身につけさせる。文化的な生活への参加の重要な基盤である文

学の概観的知識を伝える。さらに、認識のさまざまなカテゴリーを身につけ、文化的価値意識と判断力を育成する。文学と芸術を皆と共に受容しその楽しみを知ることが重要である。

#### ④ 教科書の構成の一例

16州中15州の、ギムナジウム上級学年用の教科書に認定されている、Ernst Klett. deutsch. kompakt. Oberstufe. (Klasse 11-13)は、教科書本体360頁、概観部分(事典的項目説明、アビトゥア論文)部分62頁からなり、教科書本体部分は以下のような構成になっている。(https://www.klett.de/lehrwerk/deutsch-kompetent-oberstufe-ausgabe-ab-2009/produktuebersicht/bundesland-2/schulart-5/fach-14)

1 現代文学と取り組み、より深い文学との関わり方を学ぶ：6.1%

2 世界を知覚し、仲介するメディアとしての言語：22.8%

文学テキストの他、映画、諸メディア、政治的テキスト、哲学テキスト等、さまざまな種類のテキストを扱い、各種テキストの目的や戦略等の分析力、解釈力を育成する。

3 中世以来のドイツ文学史に沿っての文学：計71%

\*中世中期・バロック)：8.3%

\*18世紀(啓蒙期・感傷主義と疾風怒濤)：12.8%

\*1800年前後の転換期(古典主義・ロマン主義)：12.2%

\*19世紀(初期リアリズム・リアリズム・自然主義)：14.4%

\*20世紀前半(モデルネ・過去となった現在)：12.7%

\*20世紀後半から現代まで(過去となった現在・1990年以降の現代文学)：10.5%

文学テキストが全体の80%近く、19世紀までを「古典」と考えると、全体の39.4%が「古典」作品を素材としている。さまざまな時代の文学作品に馴染み、文学史や歴史的・社会的背景を知り、あるテキストの持つ人間観、世界観、ジェンダー観などを検討し解釈する力を身につけることが目指されている。たとえば中世の文学は「異文化のテキスト fremde Texte」理解と捉えられ、現代とは異なった中世の価値世界を知る機会とされている。なお、教科書収録の作品のほかに、各学年に割りあてられた時代の作品リストから一点を選んで全篇を生徒に読ませ、授業で扱うことが義務づけられている。

### (3) 「ラテン語 Latein」教育について

2018年4月23日にドイツの大手新聞のひとつである「南ドイツ新聞」に掲載された「もう、ラテン語学びたい子はいない？」という記事から紹介したい<sup>15</sup>。

本記事によれば、過去8年間で、ドイツ全国の学校でラテンを学ぶ生徒(日本でいう中高生)の数は2割減少したが、より長いスパン(20年など)で見れば、ラテン語学習者の数は一進一退の複雑な動きを示している、という。少子化の時代にあってもラテン

<sup>15</sup> <https://www.sueddeutsche.de/bildung/schulbildung-niemand-will-mehr-latein-lernen-oder-1.3954048>

語学習者が単純に減らない理由は、2000年度のOECDによる学習到達度調査（PISA）で、教養教育の重要性が明らかになったこともそのひとつであろうが、最大の理由は「ギムナジウム（8年制）」だ、とも指摘されている。ドイツ語圏においては、ギムナジウムは「（ヨーロッパ人の基礎教養であり、諸学の土台をなすものとしての）古典教育を行うところ」というイメージはまだ消滅してはいない。ルネサンス期以来の伝統を持つ、古典語の授業を（通常5年生から）行う「人文主義ギムナジウム Humanistisches Gymnasium」は各州に10数校から50校ほども存在している（ブレーメンやハンブルクなどの都市単独の州は除く）。また、通常のギムナジウムでも、多くの学校が課外にラテン語や古典ギリシャ語の「自主選択コース」を設置している。

2000年代始めのG8の協議において第二外国語が重視され、一学年分の過程が増設された。それにともない、（第二外国語のひとつである）ラテン語学習者も増加したのである。しかし、多くの州では生徒数が減少し続けていたから、各要因の相互作用により、ラテン語学習者数は上下に揺れていた。ドイツではもう30年以上にわたって、「古典教育の危機」が叫ばれているが、近年の調査結果は、一義的に若者たちの「古典離れ」を意味するものではない。ドイツも（日本ほどではないが）「少子化」の国であって、児童・生徒の数自体が減っている。それに合わせて、ラテン語教師の数も減っている。そんな中で、「ラテン語不要」「存亡の危機」は言い過ぎかもしれない。

#### ①「ラテン語」教育の意義と方針

既述のように、少子化が進んでいることを考慮すれば、ドイツの古典語教育は衰退しているとは言えない。2015年1月15日の南ドイツ新聞では、論説員のヨハン・オーゼルが「ラテン語教育がなくなるとはいけない理由」と題した論説記事の中で、以下のような理由を挙げた<sup>16</sup>。

・2000年にわたって学ばれ続けてきたラテン語には、「学ぶこと」のエッセンスが蓄積されており、ラテン語学習は「学ぶことを学ぶ」ことになる。

・文化・哲学・政治・歴史を学問的に学ぶためのしっかりした入り口になる。

・ラテン語を学ぶことで、「文献学者」とは何をする人たちがよくわかる。そして、文献学はラテン語とは直接関係のない学問にも基礎を提供している。

・ラテン語を履修している大学生は、明らかに全科目にわたって成績がいい、という調査結果も出ている。

・2000年にわたって続いてきた知的トレーニングの伝統を、「現代のニーズに合わない」といって止めてしまうのは軽薄だろう。

一方、ノルトライン＝ヴェストファーレン州古典語教員協会会長ベネディクト・ジモンズは「すべてを物質的な利用価値に結びつけようとする風潮は、教育にも本質的な影響を与えています」という。ラテン語の知識は他の外国語を学ぶ際にも助けになる、あるいは、外来語の理解に役立つ、大学に入ってから役に立つ、などとは言われているが、「それらの主張は間違いではないものの、それでラテン語を学ぶ生徒が増

<sup>16</sup> <https://www.sueddeutsche.de/bildung/pro-lateinunterricht-die-bedeutung-bleibt-1.2274649-2>

えるかと言え、そう単純なものでもありません。われわれは、生徒たちとその両親たちに、古典語を学ぶことの価値をより強く主張していかなければなりません<sup>17</sup>」という。

---

<sup>17</sup> 『南ドイツ新聞』2018年4月23日号

## ＜参考資料 12＞フランスの高校における国語教育

フランスの高校における国語教育（つまりフランス語教育、以下同様）は、第2学年（日本の高校1年）と第1学年（同じく高校2年）で必修であり、第1学年の終わりに国語のバカロレア（大学入学資格試験）を受験することになる。

フランス国民教育省（文部科学省に相当）が公表している方針によれば、第1学年の国語教育の基本的な精神は、個人と市民の形成という観点から、生徒たちの教養を涵養し、文章や口頭での表現力という基本的な能力を培うことにある。より具体的には、以下のような目標が掲げられている<sup>18</sup>。

- 1) 共通の文学的教養を獲得できるように、生徒たちは作品を読み、理解し、評価することを学ぶ。その教養は、広く社会と、他の芸術と、さまざまな知識の分野に拓かれていなければならない。
- 2) 作品を理解するにあたってその歴史的背景を解説するが、生徒たち自身の感性と創造性にも配慮する。分析と解釈の能力を涵養すると同時に、生徒たちの関心と美意識を育む。
- 3) 国語の授業をつうじて生徒たちの判断力と批判精神を深め、さまざまな主題について個人として考察を展開できるようにする。

高校での国語の授業は、基本的に中世から現代までのフランス文学の作品を読み、理解し、解釈すること、そしてその解釈を文章と口頭で表現する術を学ぶことにある。ただし日本と比較した場合、フランスでの「文学」概念はかなり広い。詩、演劇、小説、随筆だけでなく、哲学、宗教、政治、社会を論じた著者も含まれる。デカルト、パスカル、ルソーの著作を国語の授業で学ぶのはそのためである。

使用される国語の教科書は、年代的な配列にしたがって作家と作品の抜粋を収める。もっともよく使われる教科書は、中世、17世紀、18世紀のように世紀ごとに1冊作られ、それぞれかなり分厚い。ただし時間数の関係で、それらを網羅的に学習することは必須ではないし、教師の裁量に任されている部分は大きい。また、毎年多様なジャンルからいくつかの作品が選ばれて、それを1年かけて集中的に読み、解釈する。国語科の目的は、国語と文学を学び知ること、生徒たちが理解、考察、解釈、議論そして表現するという基本能力を身に付けられるようにすることである。高校の国語教育の中心は、広義の文学作品を理解し、その解釈を文章および口頭で論理的に表現できるようにする教育ということになる。そのために生徒たちは、文学作品を解釈する論述文（フランス語でdissertationと言う）を執筆する訓練を受ける。

論理的思考を育むための教育として、フランスでは哲学の授業がある。文系、理系に共通して最終学年（日本の高校3年）に設定される。この授業では哲学上の重要な諸テーマについて、古代ギリシアから現代までの主要な哲学者たちの著作の抜粋を解釈しながら、人間と社会と世界について思考することを学ぶ。哲学史的な知識を得ることよりも、みずから思考し、議論を構築する術を学ぶのである。「国語」と「哲学」の授業は、フランスの高校教育の根幹をなしている。

<sup>18</sup> <https://www.education.gouv.fr/pid24239/les-programmes-du-lycee.html> 最終閲覧：2020年1月17日

なお 2019 年秋の新年度から、「人文学・文学・哲学」という新しい科目が第1学年用に設置された。人文学的な知を体系的に学び、現代の人間と社会にとっても重要な課題であるさまざまなテーマについて考えるための総合的な科目であり、国語の教員と哲学の教員が連携して授業を担当することが期待されている。古代から現代に至るまでの文学、哲学、政治学、社会科学の著者の作品の抜粋を修めた教科書に依拠しながら、古典的な文章を読み、解釈し、議論し、体系化することを学ぶ。2019 年度の教科書の内容は、第1部「言葉の力」、そのなかに第1章「言葉の技術」、第2章「言葉の権威」、第3章「言葉による魅惑」が含まれ、第2部は「世界の表象」、そのなかに第4章「世界の発見と文化の多様性」、第5章「描写する、表現する、想像する」、そして第6章「人間と動物」が含まれている。